

册 縮

味 薩 菩

著 山 介 里 申



516
277x



始



册 缩

516

峠 薩 菩

277x

著 山 介 里 申





中里介山著

縮冊

大菩薩峠

第三

春秋社版



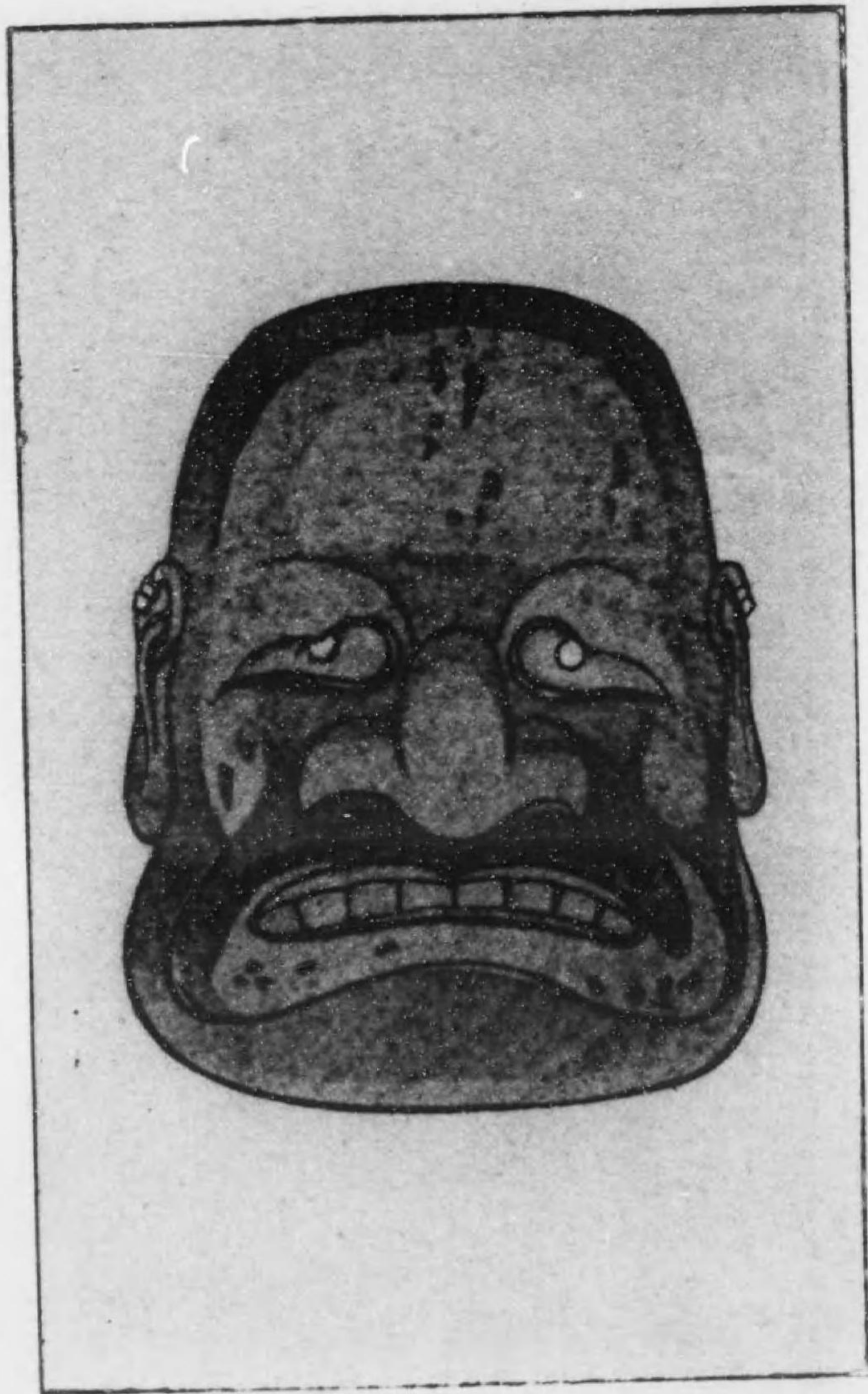


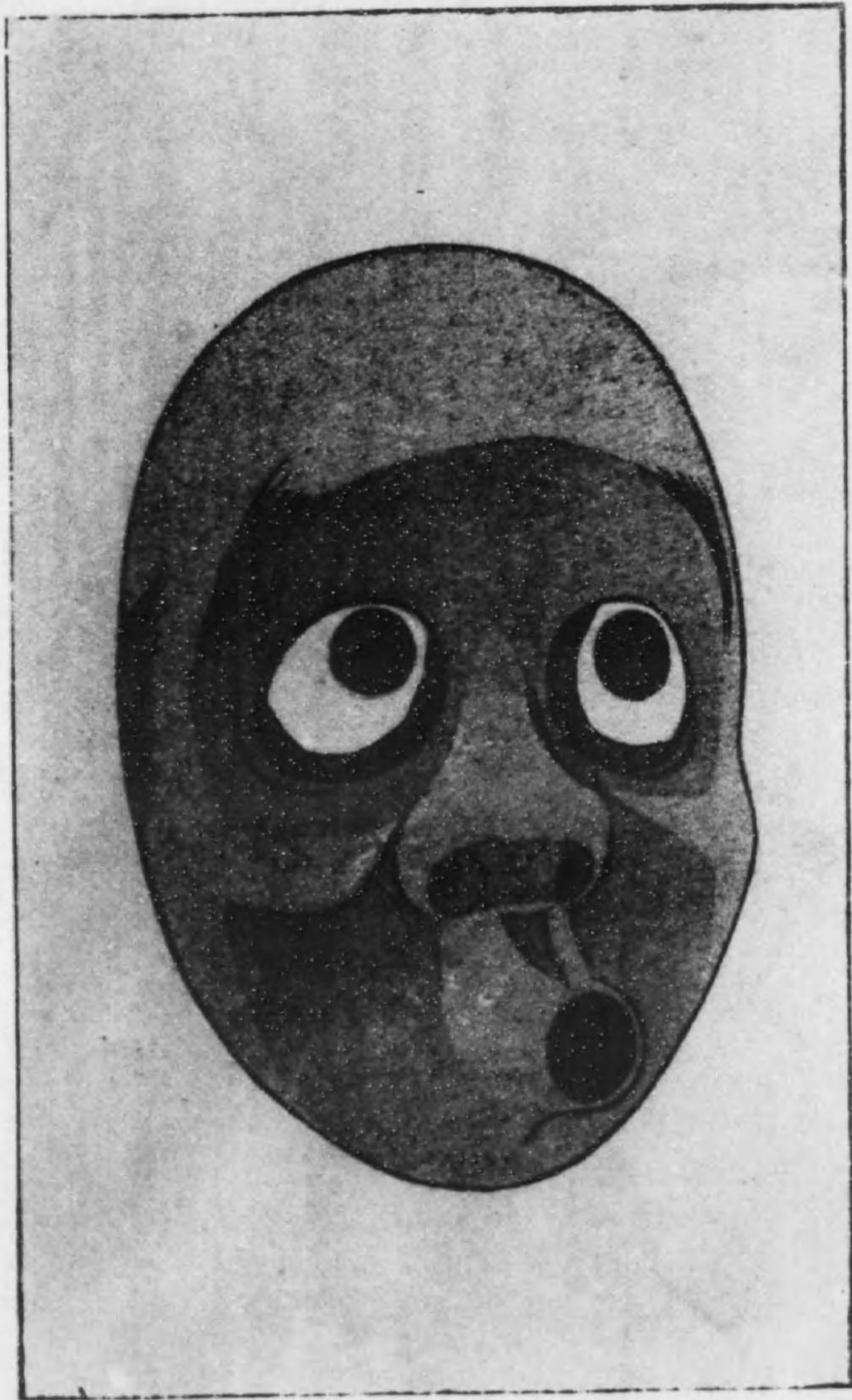
516
277元



中西
一
郎

83M43438





大菩薩峠

(如法園夜の巻)

中里介山 著

一

お君は、やがて駒井能登守の居間へ通されました。

能登守の居間といふのは、其處へ案内されたお君が異様に感じたばかりでなく、誰でも此の居間へ来たものは異様の念に打たれないわけには行かないものであります。それは疊ならば六十疊ほどの廣さを持つた居間に疊を敷いてあるのでなく、板張にして絨氈のやうなもの敷き詰められてありました。

その廣い室の中央と片隅には卓子が置かれて、その周圍には椅子が置かれて四方には明るく窓が切つてあります。

一

長押の上や壁の間には、幾つもの額が掲げられてありますが、どの額も、軍艦や大砲やまた見慣れない風景や建築の圖案であります。それから書棚には多くの書物があります。その書物には洋式の書物が特に限立つてゐるのみならず、書棚の隅や、本箱の上、また別に棚を作つて、見慣れない様々の武器の實物と模型とが無數に陳列されてあります。

様々の武器といふうちにも、殊に鐵砲が多く殊に小銃には幾つかの實物があり大砲は模型として順序よく並べられてありました。舊來の屋敷を、こんなに能登守が好みで建築をし直したものだ、お君は其の位の事はわかりますけれども、その他の事は、目まぐるしい程で、何と云つてよいかわかりません。その卓子の近くの椅子の上へ腰を掛けて宜いのだか、また絨氈の上へ座らねば失禮であるのだか、それさへお君にはわかりませんで、案内のあとに隠れてたゞポーツとして立ち竦んでしまつたやうです。能登守は其の時、片隅の椅子に腰かけて卓子に向つてゐました。黒羅紗の筒袖の陣羽織を着て野袴を穿いてゐました。門番の足輕が云つた通り、今まで訓練の指圖をしてゐたのが、それが濟んでからこゝへ來て書物を開いて何か書いてゐるのでありませう。その書物は、やはり見慣れない文字の書物であります。それを見慣れた文字に書き直してゐたやうであります。今まで廣場で訓練の指圖をしてゐたといふ能登守はそれが爲に血色が活々として汗ばんだ處へ黒い髪の毛が亂れかゝつてゐました。

『よくお出でなされた、暫らく其れでお待ち下さい』
と云つて、筆を持ちながら、お君の方へ向いて莞爾とした面には、

懐しいものがあります。

「はい」

お君は、やつぱり立ち場に困つて、椅子へ腰をかけるのは失禮であらうし、さうかと云つて絨氈の上へ座つて笑はれはすまいかとの懸念で、眞赤になつて立ち竦んでゐるのみであります。

駒井能登守は和蘭から渡つた砲術の書物を今自分の手で翻譯してゐる處であります。丁度それを程よい處でクギリをつけてから筆をさしおいて、その椅子から立ち上がつて

「お君どの、よく見えましたな、一人で……」

と云つて能登守は、眞中にある方の大きな卓子の方へ進んで、

「さあ、それへお掛けなさるがよい」

「はい」

能登守は、お君に椅子をすゝめながら、自分も椅子に凭りました。

お君は漸く、その椅子へ腰を卸ろして、能登守と卓子を隔て、座には就きましたけれど、恥しいやら恐れ多いやらの感で胸が一ぱいです。

「先日は結構な下され物を、まことに難有う存じました」

やつこの思ひで、お君はこれだけのお禮を能登守の前へ申述べたのであります。

「ナゼ、お前は、わたしの處へ来て呉ない」

と能登守は碎けて斯う云ひました、その言葉の温か味は感じたけれども、その意味がお君には、よく呑込めませんでした。

「お禮に上らうと存じましても、あまり恐多いものですから……」
お君は、おどくとして申譯をしました。

「お前が、わしの處へ来て呉るとわしは嬉しいけれども伊太夫の家で、お前を放す事は出来ぬといふから是非もない」

と能登守はお君の横顔を見ながら斯う云ひました。この一語は、少からずお君の胸を騒がせました。今までは身分の違ふ人の前と、見慣れの結構の居間へ通された事から、氣がわく／＼してゐたのですけれども、能登守の今の一言は、それとは全く異つた心でお君の胸を騒がせました。

「わたくしは左様な事を、一向承はりませぬ、主人からもそのやうなお沙汰のあつた事をお聞き申ませぬ故に……」

「ナニ、それを聞かぬ、ではわしがお前の身の上の上に就いて、伊太夫へ頼んでやつた事が、お前の方へは取次がれんのぢやな」

「はい、どのやうな御沙汰でございましたか……」

「それは不審」

能登守は美しい面を少しく曇らせました。お君はハラ／＼とした氣持が休まりませんでした。やがて能登守は斯う云ひました。

「外ではない、わしの處は此の通り女手のない家、それ故に伊太夫の方で差つかへの無い限り、お前にわしの家へ来て働いて貰いたい方が如何ちやと家來をして申入れた筈、それを伊太夫が斷つて來た」

「まあ、そんな有難い御沙汰を……如何して旦那様が」

お君は當惑に堪へないのであります。御支配様からの御沙汰をお請をすると思ひないに拘らず、

左様な御沙汰があつたならば一應は自分の處へお話しが無ければならない筈だと思ひました。いくら主人だと云つても、自分の身の上の御沙汰を途中で支えてしまうと云ふのは道理のない事だと思ひま

した。さりどて、あの大家の旦那様が左様なことをなさる筈もなし
 ……その時はたと思ひ當つたのはお銀様の事であります、あ、
 それではお銀様の仕業と、直ぐに斯う感づいてしまひました。
 殿様から御沙汰があると、旦那様は必ずお銀様へ其の御沙汰のお傳
 へがあつたに違ひない、それをお銀様が、あの氣性で、わたしに話
 なしに御一存でお断りなすつてしまつたに違ひないと、お君は直ぐ
 にさう感づいて見ると、お銀様に云はれた言葉が一々思ひ當るので
 あります。お前が行けば殿様は喜んでお會ひ下さると、お銀様が断
 言した事、そこに何かの確信があるやうな言ぶりが、お君によく思
 ひ合はされると共に、殿様はお前を好いてゐる……と云つたお銀様
 の言葉、薔薇のやうな甘い香と鋭い棘とが、兩ら含まれてゐたのも
 漸くわかつて來るとお君は我知らずポーツと上氣してまたも面が眞

赤になりました。さうしてお銀様の仕打が憎らしくなつて堪りませ
 んでした。

『わたくしは初めて承はりました、殿様から其のやうなお沙汰の
 ありました事をわたしは今まで存じませんでございました』

お君は自分の冤罪を申開きするやうな態度で斯う云ひました。

お君が、自分の冤罪を主張するやうに、熱心になつたのを、能登守
 は意外に思ひました。

『お前がそれを聞かない、では伊太夫がお前に傳へることを忘れた
 のであらう』
 と云ひました。

『左様でございませうか知ら』
 とお君が本意ないやうに云ひました。

「伊太夫が承知をすれば、お前は此處へ来て呉るか」
と能登守は頼むやうに優しい言ひ方であります。

「それは御主人の方さへ、お暇が出来ますれば……」

とお君は、我ながら出過ぎたやうに思ひ直しました。

「それでは、もう一度、伊太夫に頼んで見やう」

お君は、やはり其の言葉を有難い事に思ひました。けれども、また其處に一つの故障があることを同時に考へさせられないわけには行きません。その故障といふのはお銀様の事であります。旦那様は御承知があつてもお銀様が何といふかど其れが心配であります。併しそれとても、如何にか言ひこしらへる事が出来るものと安んじて居りました。

お君は、今此の殿様の優しい言葉を聞き、これから始終、この殿様

の傍に仕へる事が出来るといふ嬉しさに胸が一杯であります。それが爲に胸が一杯で、己れの身分を考へる餘裕もありませんでした。また何の爲に自分が此處に来たのかといふ使命の程も忘れてしまつてゐました。やがて其れを考へついた時にお君は悲しい心持がしました。悲しい心持が慌る心持で焦き立てられました。それで幸内の行方不明になつた事を逐一申上げてお頼みをしなければならぬと思ひました。

お君は漸く、その事の一切を能登守に物語りました。幸内が伯耆の安綱と云はれる刀を持つて出て家へ歸らないこと、それが爲にお嬢様が一番心配してゐらつしやること、幸内は此の御城内の誰方様かへお目にかけるつもりで其の刀を持つて出たらしい事、どうかお嬢様の爲に殿様のお力添をお願ひ申したいといふ事を、お君は嘆願し

たのであります。

能登守は黙つて其れを聞いて、何か考へてゐる丈で返事をしませ
ん。併し、それだけのお願ひを申上げて置けば、お君の此處へ來た
使命は盡きたわけであります。

お君がお暇をして歸らうとする時に、能登守は立つて一方の机の
上から一つの小さな箱を取つて、

「まだ歸らんでも宜からう、お前に見せたいものがある」
その蓋を取つて、お君の前に置きました。

「まあ、これは、殿様のお姿……」

と云つて立ちかけたお君は、この箱の中に有つた繪姿に見入つてし
まひました。これは繪姿ではありません。けれども、お君は繪姿だ
と思つて、

「ほんとに、お生寫し、どうして此んなに上手に書けるものでござ
ませう」

と我を忘れて驚嘆したのであります。

「それは書いたのではない」

と能登守は微笑しました。けれどもお君には其の意味がわかりませ
んでした。

「恐れ乍ら此方のは殿様、こちらのお方は……」

お君の見てゐる繪姿には二人の人の姿が寫し出されてあるのであり
ます。その一人は此の能登守、もう一人は氣高い婦人の像でありま
した。

「それは、お前によく似た人」

この時のお君が寫真といふものを知らう筈がありません。眼に見た

ことは愚か、話にさへ聞いたことはありません。

「それはお前によく似た人」

と云はれてお君の胸は何といふ事なしに騒ぎました。念を推してお尋ねするまでもなく、これは殿様の奥方であらうしやるとお君は覺りました。

お君は奥方のお像を、じつと見入つて

「お前によく似た」と仰有つた殿様のお言葉が、お謙遜なさるつもりのお言葉ではないと、お君は自分ながら、さう思ひました。己れの容貌を買ひ被るのも女であるし己れの容貌をよく知るのも女であります。

「それは寫真といふもので筆や繪の具で書いたのではない、機械で取つて薬で焼きつけた生のまゝの像じや、日本ではまだ珍らしい」

繪姿だとはかり思つて、お君が餘り熱心に見惚れてゐるもので、能登守が少しばかり説明を加へますと、

「これは書いたものではございませんか、まあ、機械で、どうして此んなによくお像を寫すことが出来るのでございませう、切支丹とやらの魔法のやうでございませう」

「さうく、最初はそれを切支丹の魔術と思ふて居た、今でもその寫真を取ると生命が縮まるなんぞと云ふものが多い、けれども其れは取るに足らぬ愚かな者の言分じや」

「ほんとにお珍らしいものでございます」

お君は其寫真を飽かず見て居りました。自分は今お暇乞ひをして立たうとしてゐることも忘れて寫真から眼を放すことが出来ません。

「それをお前が欲しいならば、お前に上げてても宜い」

能登守から斯う云はれた時に、面を上げたお君の眼は狂喜にかゞやいて見えませんでした。

斯うしてお君は能登守から、箱に入れたまゝ紙取りの寫真を戴いて帛紗に包み後生大事に袖に抱えてこのお邸を立ち出でました。

其れから御門まで来る間も、お君は嬉しさで宙を歩んでゐるやうな心持です。その嬉しさのうちには、やはり胸を騒がせるやうな戦きが幾度か往來をします。その戦きはお君に取つて怖ろしいものでなく、心魂を恍かすほどに甘いものでありました。

「わたしは、あの殿様に好かれてゐる、あの殿様は、わたしを憎いやうには思召してゐない、たしかに——」

お君は身を揺つて、そこから己れの心の亂れて行くことを更に氣がつきませぬ。

況してや、お君は、お銀様に頼まれて來た事も、そのお銀様がお濠の外で待ち焦れておゐでなさるだらうといふ事も、この時は思ひ出す餘裕がありませんでした。最前親切に案内された門番へさへも一言も挨拶をしないで門を通り抜けやうとして、門番から言葉を掛けられて漸く氣がついて、あはて、お禮を云つた位でありました。橋を渡つて、お銀様を待たせて置いた柳の樹の處へ來て見たが、其處にお銀様の姿が見えませんでした。

「お嬢様は」

と云つて、お君は其のあたりを見廻しましたけれども、そのあたりの何れにもお銀様らしい人の影は見えませんが、その時に、お君に自分が能登守の前に餘り長くの時を費した事を考

へました。待たせる自分は嬉しさに包まれて時の移るを知らなかつたけれど、待たせられたお嬢様に取つては、随分長い時間であつたらうと氣がつかしました。

二

これより先き、お濠の岸に立つてお君の歸るのを待つてゐたお銀様は、その餘りに長いことに氣を焦りました。

役割の市五郎が傍へ寄つて來た時に、お銀様は振り返つて其れを睨みました。市五郎は何氣なく其れを反らして行つてしまつたが、お銀様が其れを忘れてやゝ久しいのに、お君はまだ御門から出て來る模様がありません。

お銀様はお城の方を睨んで、荒々しく足踏をしました。それからお濠の岸を、彼方へ行つたり此方へ歸つたりしてゐました。

さうすると、問屋場の方から五六人固まつて私語きながら此方へ來る者があります。それは例の折助連であります。

自分で無理にすゝめて廊の中へやつて置きながら、お銀様は焦れて焦れて堪らなくなつてゐました。自分を平氣でこんなに待たせて置くお君を呪うやうな心持になつて城の方ばかり睨んでゐましたからこの五六人の折助連が私語きながら、此方へ近づいて來ることも氣がつかしません。

さうしてゐると、折助の一人が、ふら／＼と歩いて來て、お銀様に突き當るやうにして摺れ違つて、

「危ねへ／＼」

と云ひましたから、お銀様も気がつくど其の折助は酔つてゐて足許も定まらないやうであります。お銀様は驚いて其れを避けました。それを避けると其の次に、また一人の折助が通りかゝつて、同じやうにお銀様に突き當らうとしました。お銀様は、また驚いて其れを避けると、第三番目の折助が、どうくお銀様に打着かつてしまひました。お銀様は危なく足を踏み縮めますと、

「やい、氣をつけやがれ」

と其の折助が云ひました。わざとする亂暴さに、お銀様は口惜しがつて折助共を睨めて立つてゐました。お銀様の眼つきは、殊更に睨めないでも、いつでも怒氣を含んでゐるやうに見えるのであります

「へゝゝゝ、これはく」

と云つて折助は急に、ふざけた聲色を使つて、面巾で隠してあるお銀様の顔をワザと覗き込むやうにして、

「お女中のお方でゐらつしやる、それとは知らず飛んだ御無禮」

なんぞと云つて、またくワザとらしい聲色と身ぶりでお辭儀をしました。

お銀様は、それを見ないでふいと向き直つて歩き出すと、

「兄弟、如何したんだい」

と云つて他の折助が寄つて來ました。

「いや、このお女中に飛んだ失禮をしてしまつたんだ、ツイ足がよろめいた爲に、このお女中に突き當つてしまつたから、今、謝罪つてゐる處なんだ、兄弟、何とか取なして呉んねへ」

と前の折助が此んな事を云ひました。

「そいつは悪い事をした。まあ、何方のお女中さんか知らねえが、

この野郎は、平常から軽佻な野郎でございませうから、ナニ別に悪い心があつてする譯じやあございませう、どうぞ勘辨してやつてお呉んなさいまし」

他の折助が、これもまたワザとらしい身ぶりど聲色で、揉手をしながら、お銀様の方へと固まつて來るのであります。

お銀様は腹を立てました。無禮にも無作法にも限りのない奴等だど口惜しくて堪りませんでした。それだから黙つて彼等を振拂つて行かうとするど其の前へ廻り

「如何か、御勘辨をなすつてお呉んなさいまし」

それを振拂つて、また進んで行くど、

「野郎が、あんなに謝罪るんだから、如何か御勘辨をして上げてお呉んなさいまし」

お銀様は心の弱い女ではありません。どちらかど云へば氣丈な女であります。それだからこれ等の無作法な折助に一言も口を利くことを忌がりました。それを振り拂つて避けやうとしました。折助共は其れを前後から取り捲くやうにして追ひかけるのは如何も何か計畫あつてする事どしか思はれませう。

「これほど、謝罪つても、何ともお許しが出ねえのは、よく／＼見倒された野郎だ」

と折助の一人が言ひました。

「ナニ、お女中さんが標緻が宜くつてゐらつしやるから、それで氣取つておゐでなされるのよ、下郎共どは口を利くも汚れと思つておゐでなされるんだ」

と、また一人の折助が云ひました。

「違えねえ、折助なんぞはお齒に合はねえといふ思召なんだから其れでお言葉も下し置かれねえのだらう、あゝ、情なくなつちまはあ、孫子の代まで折助なんぞをさせるもんじやねえ」

と云つて、また摺寄つてお銀様の面を覗き込むやうにしました。お銀様がついと横を向くと、乗り出してわざとまた覗き込んで

「はゝゝゝ」

一度に笑ひました。お銀様は齒咬をして彼等を押し退けて避けやうとするど、折助達は、ゾロ／＼と後をついて來るのであります。お銀様は、ついに立ち竦んでしまふより外は無くなりました。さうすると折助もまた其の周圍に立ちはだかりました。

「お前達は女ど侮つて、このわたしに無禮な事をする氣か」

お銀様は堪へきれなくなつたから聲を慄はして折助共を詰責しまし

た。お銀様で無かつたら、是非はさて措いて、一應この折助共に謝罪つて見るべき儀でありましたけれど、お銀様は口惜しさに堪へられないで、我が家の雇人を叱るやうな態度で嵩にかゝりました。

「如何致しまして、無禮をするなんぞと、そんな事がございませぬのですか、お女中がお一人では途中が案じられますから、斯うしてお送り申し上げやうと云うんでございます」

折助は斯う言ひました。

「わたしは、他に連の者がある、それを待つてゐるの故、お前方のお世話は要らぬ」

お銀様は、やはり叱るやうな言ひぶりであります。折助共はお銀様が何か言ひ出すのを待つてゐたと云はぬばかりでしたから

「そんな事を仰有らなくつたつて宜いじやあございませぬか」

「無禮な事をすると許しませぬ」

お銀様は懐中へ手を入れました。その時に一人の折助が横の方からお銀様の被つてゐた頭巾を引張りました。眼ばかり見えてゐたお銀様の面の口もとから額へかけて斜に其の呪はれた怖ろしい面が見えました。

「はゝゝゝ」

と折助共は聲高く笑ひました。齒をキリキリと咬鳴らしたお銀様はキラリ光るものを手に持つてゐました。

「やあ、危ねえ、刃物を持つてゐる」

前後から五六人の折助が寄つて集つて、お銀様の持つてゐた懐剣を奪ひ取らうとして怪我をしたものもありました。

「面倒臭いから引擔いでしまへ」

彼等は寄つて集つて無體な振舞に及ぼうとする時に妙詮寺の角から突然飛び出して來た強さうな男、

「この野郎共、飛んでもねえ事をしやがる」

折助共をホカ／＼と殴り飛ばしてその一人を濠の中へ蹴込みました

「やあ、役割！」

と云つて折助は他愛もなく逃げてしまひました。この場へ來合せた強さうな男は役割の市五郎であります。

「お嬢様、もう御安心なさいまし、ほんとに彼奴等あ、悪い奴だ、

お嬢様とも知らずに碌でも無え事をしやがる」

市五郎が此んな事を云つて慰めてゐる處は市五郎の宅であります。

「市五郎どのとやら、お前が來て呉れなければ、わたしはドノやう

な目に合つた事やら、よい所へお前が来て呉れたから、それで悪者が皆んな逃げてしまひました」

お銀様は泣いてゐました。

「ナニ、多寡の知れた折助共でございませうが、打捨つて置く癖になりますから、少々大人げねえと思ひましたけれど、二つ三つ食はしてやりました。御心配なさいませうな、これからお屋敷まで送らせて差上げますから」

「市五郎どのとやら、わたしには連の者があつて其れを待つてゐた處、その連の者に沙汰をして貰ひたい」

「左様でございませうか、そのお連の方と仰有るのは何方へお出でになりました」

「御城内まで参りました、もう歸つて来て、あのお様傍で、わた

しを探してゐる事と思ひます、早う、其處へ人をやつて、わたしが此處にゐることを知らせて下さい」

「へえ、宜しうございませうとも、さうして其のお連の方のお名前は何と仰有いますな」

「それは君と云つて、年もわたしと同じ位、わたしと同じ此のやうな衣裳を着て居りますわいな」

「成程、お君さんと仰有るのでございませうな、へえ、宜しうございませう、今、人をやつてお迎へ申して差上げますから、御安心なさいまし」

「この甲府にも、わたしの親戚はあるけれど、誰にも言はないやうに頼みます、わたしが悪い者に出合つて、あんな狼籍をしかけられたと、それを世間に知られては外聞になるから内密に頼みます」

「へえ、もう其の邊は心得たものでござりまする、人様の外聞になるやうな事を頼まれたつて觸れて歩くやうな、そんな吝な野郎でもございませぬから御心配なさいますな、まあ、何にしてもお怪我が無くて宜うございしました」

「あの。早く連の者に沙汰をして」

「へえ、宜しうございます、今、使に出した野郎が、もう歸つて來ますから、歸つて來たら直に飛ばせてやりますでございませぬ。お乗物なんぞは、こゝで一聲怒鳴れば御用が足ります。婢でもお召物やお召物のお世話をして上げるんでございませぬ。まあ其のうち婢も歸つて参りますから」

「髪や着物なんぞは拘ひませぬ、あのお君が歸つて來さへすれば直にお暇をして屋敷へ歸りたい、早くあの子へ沙汰をして」

「へえ、ごうも困つたな、いつも二人や三人はゴロ／＼してゐる癖に、今日に限つて婢あまでが出拂つてしまふなんて、と云つて俺が出向いて行けば家は空になるし、野郎共も大概察しがありさうなものだ、愚圖々々してゐると日が暮れちまうじやねえか、日が暮れちまつた日にやあ、お嬢様を此處へお泊申さなけりやならなくなるんだ、そんな事にでもなつて見る、お屋敷で如何なに心配なさるか知れたもんぢやねえ」

市五郎は焦れ氣味でひとり言を云つてゐるに拘はらず、自分は長火鉢の前へ御輿を据えて悠々と脂下がつてゐました。

三

宇治山田の米友は、この時分に八幡宮の境内を出て來ました。米友

は油を買うべく、町へ向つて出かけたのであります。

町へ出る時にも、やつぱり米友は鳥帽子を冠つて白丁を着て居りました。それから例の杖に油壺をくくりつけて肩に擔いで居りました。今夜も亦でえたらばつちの來襲に備うべく燈籠の番をする必要があればこそ、油を買ひに行くのであります。

でえたらばつちといふのは抑々何者であらうかといふに、これは傳説の怪物であります。素敵もない大きな男で、常に山を脊負て歩いて、足を田の中へ踏込んで沼をこしらへたり、富士山を崩して相模灘を埋めやうとしたり、そんな事ばかりしてゐるのであります。

でえたらばつちといふ字には何を當筈たら宜いか、時によつては大多法師と書きます、處によつてはレイラポツチとも云ひます。そんな馬鹿々々しい巨人があるわけのものではないけれど、諸國を旅行

したものは、何處へ行つても其の傳説を聞くことが出来ます。今でも土地によつては其の實在をさへ信じてゐる處もあるのであります。でえたらばつちが八幡様へ喧嘩を賣りに來るといふ傳説の迷信が取り拂はれないから、米友は今夜も燈籠へ火を入れなければなりませんでした。

「でえたらばつちもでえたらばつちだが八幡様も八幡様だ」

米友はブツ／＼云ひました。實際米友の粗雑な頭でさへも、でえたらばつちの實在を信じきれないのであります。わざ／＼眠い眼を擦つて、實際有るか無いかわからないものゝ來襲に備へてゐるといふことは、可なり馬鹿々々しいものだと思はないではありませんでした。

併し、米友は今宮仕への身であります。馬鹿々々しいからと云つて

其れを主張した日には、また追ひ出されてしばらくは路頭に迷はねばならないと思つて、これまで随分追ひ出されつけてゐるだけに、多少身にこたへがあるから、馬鹿々々しいは馬鹿々々しいなりに辛抱して、その油買ひにも行き油差しもしやうと云うものであります
 『油買ひに茶買ひに、油屋の椽で迂つて轉んで、油一升こぼした』
 と町の子供が、米友の油を買ひに出た處を見て囃しました。
 米友は、それに取り合はないで澄まして歩きました。子供等にとつても大人にとつても米友が油買ひに行く形は可笑いものでありまじたらう。

八幡の社を出て米友は三の堀を、廊の中へと行きました。廊を抜けて町の方へ行かうとして、堅町の正念寺の角を曲つて二の堀の際を歩いて行くうちに、米友は

「あつ」

と云つて立ち止まりました。

さうして猿のやうな眼を圓くして頻りに御門の橋のあたりを見つめてゐました。

「あつ、ありや」

と云つて吃りました。吃つた時分には、今米友が見かけた人影は、御米藏の蔭へ隠れてしまひました。その人影の陽れた御米藏を目ざして米友は一目散に驅けて行きました。

その舉動は、可なり粗忽つかしいものであります。遂には油壺が邪魔になるので其の油壺を振り落して堀際を驅ました。米友の身につては油壺も大切ですが、その油壺を抛り出してさへ、なほ追求めやうとするものがあつたと見なければならぬ。外でもない、

米友は今此處で計らずもお君の姿を認めただからであります。

「米友が其の不自由な足を引ずつてわざ／＼甲州まで来たのは、一にお君を求めんが爲でありました。米友に取つてお君は唯一の幼な馴染であり、お君に取つても米友は唯一の幼な馴染でありました。」

米友は、今しばらく旅費に窮したから八幡宮に雇はれましたけれど、幾らか給金が貯れば其れを持つてお君を探しに行くつもりなのであります。

それだから、今認めただ其れがお君であつたとすれば、もう油壺等は問題にならない筈であります。息を切つて米友が馳せつけたのは例の役割市五郎の宅の裏手。

「今日は」

米友は、せい／＼云つて其處に庭を掃いてゐた折助に挨拶しました

「何だ」

折助は米友を見て怪訝な面をしました。

「少しお聞き申してへ事があるんだ」

米友は唾を飲んで咽喉を湿ほしました。

「何だ」

折助は米友が、あんまり一生懸命に見えるから笑止がつて箒を持つて手を休めました。

「今、こゝへ娘が一人、入つたらう、仲間につれられて娘が一人入つたらう」

「ふん、それが如何したい」

「それを聞きてえんだ、あの娘はありや此の家に奉公してゐる娘かい、それともまた他からお客に來た娘なのかい」

「それをお前が聞いて如何するんだ」

折助は突放すやうに答へました。

「それを聞かなくちやならねへ事があるんだ、後生だから教へて呉れ」

米友は突放されじと焦き込みました。焦き込めば焦き込むほど、米友の調子が變になりますから、折助などが嘲弄するには、よい材料であります。

「はゝゝ、随分教へてやらねへもんでもねへがの、一體お前は何處の何者で、あの娘つ子とは、どんな筋合があるんだ、それから聞かして貰つた上でなけりやあ骨が折れめへじやねへか」

「うむ、俺等は今八幡様に奉公してゐるんだ、名前か、名前は米と云つてもよし、友とも云つても構はねえんだ、今、たしかに此の家

の中へ入つた娘は、ありや、國にあた俺等の幼な馴染とよく似てゐるんだ、よく似てゐるじやねへ、その子に違えねへだから會いてえのよ、向うでも亦、さう云へばキット俺等に會ひたがる」

「おやく、こりやお安くねへわけだ」
と云つて折助は、またオカしな面をして米友の面をチロくど見ました。

この問答が事ありげなので、其處へ屋敷の中から二三人の折助がまた面を出しました。

「如何したのだ」

「はゝゝ、この大將が、遙々國許から女を追つかけて來たんだ、さうして後生だから一目會はせて呉れといふ頼みよ、會はせてやらねへのも罪のやうだし、さうかと云つて、會はせて間違えでも出來た

目には取返しがつかねえし、如何したものでかど、挨拶に困つてゐる處だ」

「成程」

彼等は充分の侮辱を以て米友の面をしげくとのぞいて、

「は、は、は」

と嘲笑ひしました。米友は勃然として、

「何だ、何が可笑いんだ」

手に持つてゐた杖を取り直しました。

「まあ、兄さんや、そんな事を言はねへで歸りな、そりや、お前の眼で見ると、ドの女も此の女も皆んな其の國許にゐた馴染の女とやらに見えるんだらうけれど、今こゝを通つた女はありや、ちつとお前には縁が遠いんだ、悪い事は言はねへから、他へ行つて、もう少し

しウツリのいゝのを探して見な」

お君の事を言ひ出すと米友は必ず侮辱されてしまひます。前に兩國の輕業の小舎へ訪ねて行つた時も美人連の爲に手ヒドク嘲弄されました。

短氣な米友が、こゝで折助連と衝突を起さなかつたのは不思議であります。併し、米友も此の頃では、短氣がいつでも自分に好い結果を來さない事を少しは悟つたのか、争つても到底、折助が自分の言ふことを相手にしないのを見て取つたのか、口が吃つて利けないほどに憤慨しながら悄悄々として其處を引上げたのであります。

引上げるには引上げたけれども、確かに米友はお君を見たのです、お君が堀端を彼方此方歩いてゐる時に、一人の男が來てお君に何か云つて、お君を連れて行くのを見かけたから、それで油壺を抛り出

して追ひかけて、此の家へ連れ込まれたのを、確かに見たのでありますから其の場は立ち去つたけれども到底此の屋敷から眼と心とを離すわけには行きまますまい。

しばらく其の屋敷の周囲を彷徨うてゐた米友は、物陰へ入つて烏帽子と白丁とを脱いでクル／＼と丸めて懐中へ入れました。それから此の屋敷の前にあつた繩のれんの一せん飯屋の前を二三度往來しましたが、思ひきつて其の中へ入つて空樽へ腰をかけてしまひました。米友は此處で一せん飯を食ひはじめました。一せん飯を食ひながらも、役割の屋敷から些とも眼を放すことではありません。

けれども一旦入つたお君の姿は、此の家の何方からも外へ出た模様はありません。一せん飯を食ひ終つた米友は、なほ暫らく腰をかけて、繩のれん越しに市五郎の宅ばかりを見てゐました。そのうちに

日が暮れかゝつて、四方が急に薄暗くなりました。飯屋の親方は行燈に火を入れました。

米友は漸く氣がついたやうに、四方を見廻して、

『あゝ、俺等も燈籠へ火を入れるんだつた』

と急に考へて飛び上がりました。

けれども燈籠に火を入れることは最早米友の責任ではありません。たゞ偶然、その責任に驚かされて此の一せん飯屋を飛び出した米友は、役割の家の塀の邊をグル／＼と廻つてゐました。

丁度、黄昏時であることが米友に取つては仕合せでありました。塀の廻りや壁の下に身を摺つけて中の容子を伺つてゐると、數多の折助が、遠慮のない馬鹿話をしたり高笑ひをしたりするのがよく聞えましたけれども、女の聲としては更に聞える事がありません。米友は遂

に怵へ兼ねて、その杖を扉の處に立てかけて、それに足をかけて飛び上りました、天性の敏捷な米友は易々と扉を乗り越えてしまひました。扉を乗り越えんと其の杖を止から引き上げて、屋敷の中の井戸端から、ソツト忍びました。

こゝは、折助共の集つてゐる所謂大部屋であります。晝のうちには其んなでも無かつたのが、いつ集つたか、盛んな人集りで、一方の隅に固まつて博奕に夢中なものもありました。真中處にごろごろして竹の皮包みの館ころか何かを頬張りながら下卑た話をしてゲラ／＼笑つてゐるのもありました。

博奕の方ではスボン／＼と烈しい音がしてゐました。今まで着てゐた唐棧の着物を脱いで抛り出すのもありました。縮緬の帯を解いて投げ出すのもありました。

此方で寝轉んで、館ころを頬張りながらゲラ／＼笑つて下卑た話をしてゐるのが、米友の耳によく入ります。米友は戸の節穴から密に覗いてゐると密柑箱を枕にした折助が、

「はくしよッ」

と咳をしました。

「風邪を引いちまつた、飛んでも無え處で泳ぎをさせられちまつたから、風邪を引いちやつた」

と云ひました。

「は、は、は」

と一人の折助が高笑ひをするど、

「あつぶ、あつぶ」

と、もう一人の折助が水に溺れるやうな形をしました。

「笑ひ事ぢやあねえ、全く命がけの狂言よ、二朱じや易い」
と風邪を引いた折助は、さのみ浮き立ちません。

「全く笑ひ事じやあねえ、親方に宜い處を買つて出られて、此方は丸つきり儲からねへ役廻りだが、その中でも、兄いが儲からねへ方の座頭だ」

「そりや左様よ、手前達は、痛くねえやうに二つばかり殴られたんで事が済んだけれど、俺等と来た日にやあ御町亭にやお濠の中へ泳がせられたんだ」

「仕方が無え、頼まれりや火水の中へも飛び込むといふ事がある」

「其處が男だ」

「巫山戯るない、さうして骨を折つて置けば骨を折つただけのものはあるだらうと思つてゐたら、何の事だ、手前達と同じやうに二朱

の頭だ、結句、看板を題なしにしたのと、寒い思ひをしたのが儲けもんで、風邪を引いたのが利息だ、馬鹿々々しいつちやあねえ」

「はゝゝゝ」

折助共は愚痴を云つてゐる折助を笑ひました。

「一體、親方は、あんな狂言をして、あんな化物娘を引張り込んで如何する氣だらう、姉御の縹緞だつてマンザラでは無えし、如何も役割の氣が知れねえ」

「そりやあお前、何だな、あれはおトリといふものさ、あれをあゝしておトリにして置けば、それ案の定、あとから音色のいゝのが引かゝつて来やうと云ふものじやねへか、けれども此りや役割が色に轉んだ狂言じやあ無え、慾にかゝつた仕事だよ」

「成程」

米友は、折助共の話を聞いてギクリとしました。

米友は大部屋から奥の方へソロソロと歩み出します。今の話によつても、是非々々この家に突き留めぬばならぬものがある事は充分に合點してしまひました。

米友は其處や此處をウロウロと歩いて戸の節穴や壁の隙間を覗つてゐました。誰かに見つければ正しく泥棒の仕業であります。併しもう心の一杯に張りきつてゐる米友は、更に疑懼する處がありません戸でも開いてゐたなら、其處から家の中へ入つてしまつたでせう、けれど、戸はよく締てあり、節穴も無いことは無いし、壁の隙間もあるにはあつたけれど中は障子が立てきつてあつたり、眞暗であつたりして、どうも思うやうに家の中を窺うことが出来ません。

若しも、それらしい女の聲でもしたらと、耳を戸袋へ密着けたりな

どしましたけれども、それらしい聲も聞こえません。米友は斯うして家の周囲を一通り廻つてしまひました。

今度は椽の下へ潜つて見やうと思ひました、短軀にして俊敏な米友は椽の下を潜るのに殊に適當して居ります。

米友が椽の下へ潜らうとした時に表の方で人の聲がしました。

「へえお迎えのお駕籠でございます」

椽の下へ潜りかけた米友は其の聲を聞き咎めて耳を引立てたが、急に椽の下へ潜る事を見合せて、その聲のした表の方へ出かけました。米友は立木の蔭から今此の家の表へ來た駕籠と駕籠舁とを凝と見てゐました。駕籠が二挺釣らせてありました。人足は提灯を持つたり息杖をかゝえたり煙草を喫んだりして居たり立つたりしてゐましたこれ等の連中が其處へ暫く待つてゐると、家の中から、

「御苦勞、御苦勞」

と云つて出て来たのは役割の市五郎であります。米友はこの男を知らないけれども、多分、これが此處の親方だらうと思ひました。

「親方、今晚は」

と云つて駕籠昇共は頭を下げました

「さあ、お嬢様、これにお召しなさいまし、お女中さんは此方にお召しなさいまし」

市五郎が、あどを顧みて斯う云つたから、米友は、

「ちえッ、提灯の火が暗えなあ」

米友は腹の中で業を沸しました、米友が身體を固くして、片唾を呑んで、其の上に業を沸して待つてゐるのは、今市五郎がお嬢様と呼び、お女中さんと呼んだ其の人の影をよく見たいからであります、

間もなく其處へ現はれたのは——一層口惜しい事に頭巾を被つてゐます。頭巾を被つて面の全部はほとんど見えないから米友が身悶えしてゐるうちに、其の頭巾を被つた若い娘は前の方の駕籠へ市五郎が手を取つて乗せて垂を下ろしてしまひました。

「ちえッ」

米友は口惜しがつて地團太を踏みましたが、續いて同じやうな形をして、同じ年頃の娘が、これも同じやうに頭巾で面を包んで出て来たのを見ると

「おや」

米友は實にクワツとしてしまひました。

「おつと待つて呉れ」

斯う云つて暗の中から飛び出してしまつたのは米友としては是非も

ない事でありませう。

「何、何だど」

端なく米友の其の場へ飛び出した事によつて其の場は大混亂を惹き起しました。

その混亂を聞きつけて折助共が飛び出して來ました。折助共が米友を支えてゐる間に、市五郎は、差圖してズン／＼駕籠を進ませしてまひました。

程なく米友の姿は市五郎の家の屋根の上に現はれました。彼は杖を持つて、いつの間にか其の俊敏な身を屋根の上へと刎上げてしまつたものと見えます。

米友の姿が屋根の上に現はれた時に、下では折助共が喧々囂々として噪ぎ罵りました。梯子を持つて來いと怒鳴りました。俺は頭を二

ツ四ツ續けざまに、あの棒で殴られたと云つて齒咬みをしてゐるものもありました。眼と鼻の間を一撃の下に打ち倒されて、鼻血を出して頭の上げられない者もありました。博奕をしてゐたのも、無駄話をしてゐたのも皆んな馳集まつて來ました。

下では、斯うして折助が芋を揉むやうにして噪いでゐるのを米友は見下してハツ／＼と息を吐きました。

「ちえッ、口惜しいなア、此奴等に邪魔をされて、あの駕籠を追蒐ける事が出來ねへのが口惜しいなア」

屋根の上で足を踏み鳴らしつゝ口惜しがりました。

四邊を見廻しても、夜は眞暗であります、眞暗の中に甲府の城が聳えてゐます。二の廓は右手の方に續いてゐます、前も左もいづれも武家屋敷であります。

屋根へ上つた米友は、いつぞや古市の町で宇津木兵馬に追ひ詰められた時のやうに、屋根から屋根を泳ぐつもりでありました。米友は小躍りして屋根の瓦の上を走りました。

「ッレ、其方へ行つた」

折助が噪ぎました。

「ヤレ、此方へ来た」

梯子が飛び廻りました。ヒューと石が飛んで来ました。

「危ねえ！」

お手の物で米友は、其の石を發止と受け止めました。

「竹竿で足を打拂へ」

折助は物干竿を幾本も擔ぎ出しました。跋足になつた米友は、その危ない屋根の上を何の苦もなく走ります。市五郎の宅から大部屋の

屋根の上を馳の走るやうに走つて、武家屋敷の屋根へ飛び移りました。

折助は、いよ／＼噪ぎました。梯子と竹竿とが盛んに擔ぎ出されます。今や噪ぐのは折助ばかりでなく、武家屋敷の者共が、皆んな家から飛び出して噪ぎました。擔ぎ出されたのは梯子と竹竿ばかりでなく水弾さや槍、長刀まで擔ぎ出されるといふ有様です。米友はよく屋根の上を走りました。或時は此れ見よがしに直立して走りました、或時は、密と身を沈めて走りました。

「馬鹿にしてやがら、手前達を此方は相手にしねえんだぞ、相手にするほどの奴等でねえから其れで相手にしねえんだぞ、俺等が逃げりやあ可い氣になつて追蒐けて来る手前達の馬鹿さ加減の底が知れねへや」

斯う云つて米友が立ち止まつて息を切つた屋根の上から下を見ると家並は其處で盡きて足許は二の廓の堀の水。屋根から垣へ足をかけた米友の姿は、これも何處かの闇へ消えてしまひました。

四

何事か起るべく思はれて何事も起らなかつたのが其の夜の市五郎とお銀様とお君との一行でありました。市五郎の舉動から推せば、此の二人を何處へつれて行つて、ごんな日に遣はせる事かと思はれたのに案外にも、極めて素直に駕籠に付き添うて有野村へ入つてしまひました。有野村へ入つてお銀様の屋敷へ送り込んでしまひました。これでは

尋常の上の平凡であります。

お銀様とお君どが其の屋敷へ送り届けられた前後には、勿論伊太夫の家は鼎の沸くやうな騒ぎであります。前に幸内の行方が今以て知れない處へ、今またお銀様とお君どの行方が知れなくなつたといふ事は、伊太夫はじめ此の大盡の家の一家と出入の者を驚かせすには置きません。

お銀様もお君も、出る時は誰にも断らないで出て行きました。程なく歸るつもりでしたから黙つて行きました。お君は誰にか一言云ひ置いて出やうと云つたのを、お銀様が無下に斥けてしまひました。それだから屋敷では誰あつて二人が何時頃何處へ行つたかを知るものはありません。召仕への女のうちにお銀様とお君さんどがお對の着物を着て紫の頭巾を被つて裏の林の中を脱けておいでなすつた

のを見たといふものがあつたといふ位のものであります。

中にはお君がお銀様を嗾かして一緒に驅落をしたのではないかと云つてゐるものもありました。君ちゃんはそのんな子ではない、お嬢様があゝの通りの氣むづかし屋だから無理にお君さんを引きつれてお出かけになつたのだと辯護するものもありました。

人が八方へ飛びました。さうして甲府の市中へ入つたといふことがわかり、甲府の市中へ入つて八幡様へ參詣をしたといふこともわかり、其處でお御籤を取つたといふこともわかりました。それまではわかつたけれども、それから後が更にわかりません。處が其の八幡様でもまた一つの騒ぎがありました。それは油注の男が油買ひに出たまゝ歸つて來ないといふことであります。

それやこれやで尋ねに行つた人は途方に暮れ、馬大盡の家の混亂は

いや増しに増して來ました。其處へ役割の市五郎が悠々として兩人の駕籠を送り込んだのでありますから、市五郎が此處で如何しても器量を上げないわけには行きません。實際、市五郎は此の時馬大盡の一家一門の者からも、村中の者からも神佛のやうに思はれてしまひました。市五郎の身體から後光がさすやうに見えてしまひました。

下へも置かない持てなしといふのは此の事でありませぬ。殊にお銀様が悪い折助に謹戯はれてゐらしやる處を此の親方が通りかゝつて助けて下さつたといふ物語りは、市五郎を武勇傳の主人公のやうに村の人から崇拜させる事になつてしまひました。

市五郎は自分の手柄を自分からはあんまり語りませんでした。馬大盡の一家一門の人が様々に待遇すのを強つて辭退して歸ることにし

ました。是非に一泊をすゝめるのを断つて歸る時分には、市五郎の駕籠が提灯で隠れるほどに見送りがついて参りました。

その翌日は釣臺が幾臺も市五郎の宅まで運ばれ、羽織袴で親類や總代が町の立つたほどにお禮を述べに來ました。

市五郎は斯うして馬大盡の家から感謝を受け、それから同家へ屢出入をする事になりました。さうして主人の伊太夫と親しくなりました。伊太夫は市五郎を信用し、市五郎はよく伊太夫の意を迎へる事が出来るやうになりました。

市五郎が其の後、しばらく伊太夫の許へ出入りする間に、伊太夫に向つて一つの内談を持ち込みました。内々で伊太夫が何といふか其れを聞いて見たいやうな口吻でありました。それは意外にも縁談の事でありませう。

「お嬢様もお年頃でございますから」

と言ひ出した時に、さすがに伊太夫は苦い面をしました。

その苦い面を見て、市五郎も話し惜いのを強いて一通り話してしまふと、伊太夫の苦い面が少しく釋けかゝつて來ました。

「お組頭で神尾主膳殿」

と云つて腕組をしました。伊太夫の顔色が和いだのを見て、市五郎は其の目を外さぬやうに、

「元はお旗本のお歴々でございます。お使い過ぎで此方へおゐでなつた位でございますから、苦勞人でございます。人間が捌けておゐでなさいませう。物の酸も甘いもよくわかつておゐでなされるお方でございます。もう御當家の事もお嬢様の事も萬々御承知の上で……」
と云つて媒人口らしい口を利きました。さては此の男の縁談といふ

のは神尾主膳へ、この家の娘のお銀様を縁づけやうといふ其の取持であることに疑ひもない——人もあらうに神尾主膳へ、そして女もあらうにお銀様を——市五郎の内心は計りがたないものであります併し乍ら市五郎の口前は極めて上手であります。神尾主膳の人柄を伊太夫の心へ最もよくうつるやうに言葉を盡して、影と日向から説きかけました。さうして苦勞人の神尾様は決して御標緻好みをなさるやうなお方でなく、お嬢様があんな不仕合せでおゐでになつてもそれが爲に愛情を落すやうなお方でないといふ事、却てお嬢様のお身の上に陰ながら同情をしてゐるといふ様な事を言葉巧に説きました。その上に當地の有力者である此の藤原家と縁を結ぶことが神尾の爲には有力なる後援でありお嬢様の爲に生涯の幸福であり、且、まだ若い神尾主膳はやがて甲府詰から出世をなさる人に疑ひのない

ことなども話しかけました。市五郎の此の頃の信用の上に、その口前によつて伊太夫の心がだんだん動いて來るのが眼に見えるやうであります。

市五郎が此の縁談の事を話して辭して歸つた後で、伊太夫は一人でやはり腕を組んで考へてゐました。もとは何千石のお旗本、今は甲府勤番の組頭、それにあの娘が貰はれて行くことは家にとつて釣合はぬ事ではないと思ひました。

併し乍ら、あの娘——と思ひ出すとさすがの伊太夫も自分ながら氣落ちがしてなりません。お旗本どころではない、どんな人でもあの娘を貰つて生涯の面倒を見て呉る人があるなら大恩人だと日頃思はせられてゐないこともありません。

娘もよくそれは吞込んでつまらぬ男に侍くよりは一層獨身で通す覺

悟を定めてゐるのを見て、親としての伊太夫が不憫に思はぬといふこともありません。

伊太夫は、なほ暫らく考へた後に女を呼んで、

「お銀に此處へ来るやうに」と云つて、

「あれが何と云うか、あれの事だからウンとは云ふまい、たとへ少しは氣があつても、はいと返事をするやうな女ではないけれども若し承知したら……あれが承知をしたら、わしの方にも異存は無いのだが、併し、それが本當に當人の爲に仕合せかなあ、あれはあゝしておいた方が仕合せであるかも知れない、まあ、了見を聞いて見ての上で」

伊太夫はこんな獨り言を云つて考へながらお銀様の來るのを待つてゐました。

父の許へ呼ばれたお銀様はやがて自分の部屋へ歸つて來ました。

お銀様は父から言ひ出された事を無言つて聞いて歸りました。父が言ひ出した事といふのは神尾主膳への縁談の一件でありました。お銀様はそれを聞いても何とも返事をしませんでした。

嘘にも縁談の事は若い人の血汐を躍らせねばならぬものでありますけれどもお銀様にあつては必ずしもさうでありません。お銀様が無言つて父の許から己が部屋へ歸つたのは其の事の恥しさから返事が出來ないで歸つたのではありません。

いつも怒氣を含んだやうなお銀様の面が一層の怒氣で曇つて見えませんでした。父の物とらかな話半で、ついで立つて挨拶も無くて立ち返つた其の曇ざわりは荒いものでありました。父の伊太夫は、

「はゝあ、また失策つた」

といふやうな面して、立つて行く娘の後姿を空しく見送つてゐるばかりでありました。

お銀様が縁談を嫌ふのは今に初まつた事ではありません。その事を言ひ出されるのさへ毒虫に觸れる事のやうに忌がりました。お銀様は自分の身にかゝる縁談の事を聞くのを忌がるばかりでなく人の縁談の事を聞くのさへ忌がりました。その話を聞くと、チリ／＼と焦れて行くのが目に見えるのであります。それだからお銀様の前で縁談を云ふものはありません。お君も近頃来て、その呼吸をよく吞込んで居りました。父の伊太夫も元より其の事を知つてゐたけれども市五郎の口前を信ずるの餘りに、つい口に出してしまつて、また娘の御機嫌を損ねた事に氣がついて氣まづい思ひをして空しく見送る

ばかりでありました。

お銀様は縁談を持ち込まれる事を自分が侮辱されたやうに口惜しがあります。それと共に自分に縁談を申込んで来る男を飽くまで蔑すむのであります。自分に縁談を申込んで来るやうな男は、男の中の一番意氣地なしで恥知らずで、有るものは慾ばかりで人格も趣味もあつたものではない。男の中の屑だと口に出してまでさういふ事がありました位であります。

今、神尾主膳の事を聞いても、先づ其の蔑すみで頭を占領されてしまつて、これから父が説き出さうとする事を受け入れる餘裕はありませんでした。

お銀様は凄い面をして自分の部屋へ歸つて来て、

「お君、お君、お君や」

續けざまに呼んで、自分の部屋を素通りして、お君の部屋へ駆込みました。

お氣に入りのお君には、お銀様と同じやうな部屋が與へられてありました。この頃のお銀様は、居間から衣裳から、室内の飾り、すべてのものをお君と同じやうにしなければ納まらないのであります。お銀様は斯うしてお君の部屋へ駆込んだけれど、何處へ行つたか其處にお君の姿が見えませんでした。机の上にお銀様の好きな寒椿が一輪留守居顔に差されてありました。

「何處へ行つたのだえ」

お銀様は、お君の座るべき蒲團の上に坐つて机に向ひました。その一輪指の寒椿を取つておもちやにしやうとした時に、机の上に見慣れないものが載せてあるのを見ました。お銀様は一輪差の寒椿の方は

さし置いて、その見慣れないものを手に取りました。

「まあ、これは珍らしいもの」

と云つて、つくつく眼を注いだのは一枚の寫眞でありました。その寫眞は、先日お君が駒井能登守から戴いて來た、何よりも大切にしている二人立の寫眞なのであります。

最初はたゞ物珍らしげに取り上げたお銀様がそれをつくつくと見てゐるうちに、體がワナ／＼と慄えて來ました。眼がキラ／＼と光つて來ました。

「ア、口惜しいッ」

鬼女が炎を吹くやうに言ひ捨てました。

その寫眞には前に云つた通り二人の人の影が寫されてゐるのであります。

その一人はお銀様もよく知つてゐる駒井能登守の像でありました。それと並んだ一人は女の像でありました。

「何時の間に、こんな事に、あゝさうだ、此の間、お城の前で、わたしを待たせてゐる間に、わたしは、あんな恥かしい目に遭つてゐる時に、お君は城の中で此んなにしてゐたのか、それとは知らなかつた」

お銀様は、その女の方の像を見ながら齒を咬鳴らしました。

「此の若い御支配の殿様と、あの奥方氣取で……憎らしいッ」

お銀様は頭を自棄に振つて、銀の簪を机の上へ振り落しました。

振り落した其の簪をグイと掴んで呪ひの息を寫眞の面に吹きかけました。

お銀様の呪ひの的となつてゐる寫眞の中の女の像、それは襦袢姿の

氣高い奥方でありました。美男の聞えある能登守と並んだ、此の氣高くて美しい奥方。お銀様に取つて其れは骨を削つてやりたいほどに呪はしいものでなければなりません。

殊に、あのお濠の外で、折助共から、あんな無禮な仕打をされてゐる時に、城の中で二人に此んな事をされては……それが口惜しくて嫉ましくて腹立たしくて、呪はしくしてお銀様は銀の簪持つた手がワナ／＼と慄えて／＼堪りません。

お銀様は其の寫眞を左の手で持ち直して、右の手で銀の簪を取り直して、

「エ、覚えておゐで」

と云つてツブリ——その女の像の面を目がけて突き透さうとしました。

「お嬢様、まあ何をなさいます」

あはて、入つて来たお君は飛びついて、銀の簪を持つたお銀様の手をしかと抑へました。

「お放しなさい」

お銀様はお君の抑へた手を振り切つて、尙も其の寫眞に突き透さうとするのでありました。

「このお寫眞は、大切のお寫眞でございます、お嬢様、そんな事を遊ばしては」

「それはお前には、お前には大切なお寫眞であらうけれども」

「このお寫眞に間違ひがあつては私が殿様に申譯がありません」

「そりや、さうだらう、お前は殿様に申譯があるまいけれど、わたしは馬鹿にされたのが口惜しい！」

「何を仰有いますお嬢様、そのお寫眞ばかりは如何しても御自由に
おさせ申すことは出来ませぬ」

お君は日頃に似氣なく争ひました。お銀様はほとんど狂亂の體で寫眞を遣らじとしました。一枚の寫眞を争ふ兩女は、ほとんど他目からは組打をしてゐるほどの烈しさで揉み合ひました。

さうしてお君は、やつとお嬢様の手から其の寫眞を取り上げて、太息を吐きながら、

「お嬢様、こんな亂暴を遊ばしますなら、もうく、わたくしはお嬢様のお側にゐるのは厭でございます、今日限りお暇を戴きます」

「あゝ、それがよい、わたしも、もうお前がゐなくてもよい、お前は其の可愛い殿様の處へおゐで、わたしもお嫁に行く處があるのだから、えゝ、わたしはお嫁に行くやうに定めてしまつたのだから」

お銀様が斯う云つて其の兩眼から留度もなく涙を落した時に、お君は何と云つてよいか解らない心持になりました。

いつもならば何でもない事でしたらうけれど、其の時はそれで、二人の中が割かれてしまひました。お君が、もうお嬢様のお傍にゐないといふのは一時の激した言分のやうであつたが實は本心から其の氣で云つたのであります。

お銀様が、自分もお嫁に行く處があるといふのは、どういふつもりだかお君にはわかりませんでした。

然し、その場は氣まづくなつて、今までに無かつた張合の心持がお互に募つたけれど、直ぐにあとでお君が謝罪りました。お銀様も打ち釋けました。

謝罪つたあとで、お君は改めてお銀様にお暇乞を申出でました。お

銀様は冷やかに、それでも快くお君のお暇乞を承知しました。それにお銀様はお君に對して身の廻りのものやらお金などを多分に分てやりました。お君はそれを有難く思つて、何となく此のお嬢様の傍を離れたくない心持もしましたけれど、自分の行く先の事を考へれば、その心持も忽ち消えてしまふのであります。

お君が此のお嬢様の許を辭して行かうとする先は問ふまでもなく、それは駒井能登守のお邸であります。

主人やお銀様から色々の下され物をお伴の男に馬につけて貰つて、お君は愛するムク犬と共に藤原家を離れました。皆んな機嫌よくお君を送つて呉れました。

有野村から甲府まで行く間に、お君は一足毎に春の野原へ近づいて行く心持でありました。駒井の殿様のお情といふものが嬉しくて、

心が溶けて行くばかりでありました。それでも釜無河原へ来た時分に振返つて有野村を見ますと小高い丘の下に一面に黒くなつた森、そこが今まで世話になつてゐた馬大盡の藤原の家の構へだと知つた時に、何となく四邊の光景が物悲しくなりました。幸内に助けられて、あの家へ厄介になつたかりそめの縁が思ひ出にならないといふ事はありません、その幸内は行衛が知れないし、それよりも獨り残つたお嬢様が

『わたしもお嫁に行く』

と云つた一言は今でもお君にとつて何の意味だかよくわからないのであります。

一體に、お銀様の心持といふものはお君にはよくわかりませんでした。駒井様で所望する自分の身の上を、お銀様が途中で水を注さう

とするやうな仕打がわかりません、さうかと思へば、其のお暇乞をした時に冷やかではあつたけれど、不快な色を見せないで承知をして下すつた事もわかりません。

自分をすゝめて御城内の殿様の處へ、やりながら其の殿様のお寫眞に向つて、あんな事をなさるお嬢様の氣心は尙更にわかりませんでした。

色々ど、わからない事はありましたけれども結局、お君はお銀様の同情者でありました、お銀様が、あゝして焦れておゐでなさる心持もお君には我儘だとはかりは思はれませんでした。お銀様と幸内との間は知らないけれど、幸内が居なくなつてお銀様が一層焦れ出したことは側についてゐて手に取るやうにわかるのであります、その後お銀様がお君を愛する爲に怖ろしいやうな舉動をなさる事も度

「ありました。今や其のわたしもお側を離れてしまふ。お銀様はお一人。」

「如何か此の上ともお仕合せにお暮しなさるやうにと、お君は目に涙を持つて、心のうちに祈りました。」

五

神尾主膳の邸では此の頃普請が初まりました、建増をしたり手入をしたりする爲に大工や左官が幾人も入りました。

表の方では鑿や鉋の音で景氣が好いし、奥の方は奥の方でまた箆筒長持、葛籠の類を引き出して女中達が、蟲干でもするやうな騒ぎであります。

正月が近いから、それで御普請をなさるのだらうと表の方では云つておりましたけれど奥の方は其れだけでは納まりません。

「近いうちにお慶たい事がお有りなさるんですとさ」
早くも女中達の口から、こんな噂が立つてしまひました。

その女中達の中にはお松が居ました。お松は今箆筒から掛物の一幅を取り出して塵を掃つておりました。

「お慶たい事とは誰方」

「お松様はまだ御存知ないの」

と云つて他の女中達は面を見合せました。

「いゝえ、存じません」

「そのお慶たい事で、あんなに御普請が初まつたり、こちらではまた御寶物のお風入があつたりするのではありませんか」

女中達はお松の迂濶を笑ふやうな言ひぶりです。
 「それでも、わたくしは存じませんもの」

「それはね」

「はい」

「つい、この近い處よ」

「近い處とは……」

「近いと云つても此の甲府に近い處、それは此れから三里ばかり離れた有野村といふ處の大金持のお家から近いうちに殿様へお輿入があるんですとさ」

「それは結構でございますねえ」

お松は手に持つてゐた掛物の塵を掃つて其の紐を解きました、何氣なく開けて見ると其れは山水でも花鳥でもなく一枚の繪圖面を仕立

た横幅でありました。

神尾主膳の家に慶たい事があるといつても、それはお松が知つた事ではありません。

けれども、この度の慶事の噂がお松の耳には餘りに突飛に聞えたものですから、多少考へさせられないわけには行きませんでした。

今まで放蕩無頼に、を持ち崩して一旦持つた奥方を去つたといふ主膳が今になつて女房を迎へやうとする心持がお松にはわかりませんでした。それから此の殿様を夫に持たうといふ女は如何いふ人であらうか、その人の氣も知れないやうに思ひました。

慶たい事だから祝はねばならぬけれども、お松の常識で考へては、此の結婚がどうも末頼もしくは思はれません。どうしても一時の權略の爲の結婚であると思はれないのであります。

どうしても、お氣の毒なのは、こちらへ貫はれて来る嫁御寮だと思はないわけには行きません。このお屋敷の殿様が、ごういふお方であるか丸きり知らずに、たゞお殿様といふ名前に惚て、可愛い娘を手放す親御達をもお氣の毒と思はないわけには行きません。人の慶たいことをも呪うやうな心を起すのは淺ましいとは知りながら、お松はこの慶たい噂を慶たからず思ひました。

それはそれとして、お松が今持つて出た掛物は甲府のお城の繪圖面であります。今日寶物の風入に、お松はそれとなく此の繪圖を心掛けてゐました。塵を掃らつてゐる數多の書物や掛物の中には其れがあるだらうと思つてゐましたが、幸に其れを見つけました。

仕事に済んでから、お松は其の繪圖を持つて自分の部屋へ歸りました。部屋へ歸つて其れを擴げて、つくづくとながめてゐました。

お松のながめてゐる繪圖には甲府城を真中にして、其の廓の内外の武家屋敷や陣屋役宅などが細かに引いてありました。

お松の眼はお城の濠に沿うて東の方の一角を凝と見てゐました。外の處はさし措いて、その一角ばかりを見つめてゐました。お松の見つめてゐる一角といふのは濠を隔て、お城と、お代官の陣屋との間に挟まれた處で、其處には罪人を囚へる牢屋があるのであります。

聞いても忌な感じのする牢屋、お松はそれを見たいばかりに、わざわざ此の繪圖を窃と持ち歸つたのであります。牢屋を見たがるお松は牢屋の中に見たいと思ふ人があるからであります。

その人の爲にお松はどの位心を痛めてゐるか知れませんが、お糸を通したり、自分で遠廻しに頼んだりして神尾に縋りました。こゝへ来る道中では駒井能登守にさへも訴へて見ました。

けれども、その證據が歴然たる上に、御金藏破りの事が重いので、兎も角も本當の犯人が擧がつた上でなければ、冤罪が晴れまいといふ事を聞かされて、お松の失望落膽は云ふべくもありません。せめて牢屋の模様でも知つて置きたいと、お松は其の道筋を幾度か指で引いて見ました、けれども其れは徒ら事で、お松の力で如何しやうといふのではありません。自分の力で如何しやうと云ふわけには行かないものであると知りながら、お松は人の力の恃みにならないことを悶かしがつて、思案に暮れました。こゝは神尾の本邸とは別に一棟を成してゐる處の別宅であります。その一間に、お絹は取り澄まして一人の男のお客を前に置いて話をしてゐました。

絹の前に座つてゐる男の客といふのは役割の市五郎です。

「御別家様、先づ以て滞りなく運びましてお慶たう存じます、御結納は此の暮のうち日に日を選んでお取り交せなさいますやうに、御婚禮は來春になりまして花々しく」

市五郎が言葉を恭々しくして斯う云ひますとお絹も喜ばしさうに、

「お前さんの橋渡しで都合がよく運びました、これでわたしもワザワザ甲府へ來た甲斐があると申すもの、主膳殿もこれから身持が改まつて出世をする事でせう、三方四方慶たい事」

と云つてお絹は市五郎の勢をねぎらひました。市五郎は額を叩いて「まことにハヤ慶たい事で、何しろ、先方が聞こえた舊幣の家柄でございませぬのに、當人がまた馬鹿に氣むづかしいものでございませぬから、如何なる事かと心配して居りましたが、幸ひな事に其の當人が乘氣になりました、それで話がズン／＼と進んで參りました、……」

…併し御別家様」

市五郎が呑込んで話してゐるのは例の縁談の一件であります。

「御別家様」

市五郎はお絹を呼ぶのに御別家様の名を以てして、

「お媒灼人は誰方様にお頼み遊ばしますおつもりでございますな」

「それは……あの御支配のお二方のうち、筑前様と能登様と何れかにお頼み致すより外はなからうと思つて居りまする、また別に組頭や奉行衆のうちに然るべきお方があれば、その方へお頼みすることにしても拘ひませぬ」

「左様でございますな、お組頭やお奉行衆のうちで……それも結構でございますが、御當家様のお媒灼としては、やはり御支配様をお頼みになるのが順當でございますやう、其の御支配様と申しまして

能登様は御新任の上に、お年もお若いし、それに奥方様をお連れになりませぬ故、やはりお年と申しお二方お揃ひと申し、筑前様をお頼み遊ばすが至極宜しい事のやうに存じまする」

「わたしも左様思ひまする、それに主膳殿は能登様とは合ひませぬ」

「左様……」

「もとは同じ位の格式の旗本、それで同じ處へ勤めてゐると若い同志で、どうも氣拙くなつて困ります」

「けれども能登様へも、一應のお話しは申し上げませんと」

「それは筑前様の方を、よく／＼お頼み申して置いて、お話しを定めた上で能登様へは一通りの御挨拶だけにして置きたいと、主膳殿も申して居りました」

「左様でございますな……あれで能登様も中々、背かぬ處がお有り

なさるから、萬一、この御縁談に……そんな事もございませうまいが能登様から故障が出るやうな事がございませうと』

「それだから、最初に筑前様の方を纏めて置けばよいではありませんか、その筑前様へのお使ひは、わたしが行つて、きつと纏めて参りませう」

「左様ならば大丈夫でございます、御別家様から懇にお頼みになりまするならば、大丈夫でございます」

市五郎は其處へ仰山らしく保證を置いてお暇乞をして、歸らうとするど、

「まあ、宜いではないか、前祝ひに何か差上げたいもの……お松やお松は居らぬかいな」

お絹は市五郎を引留めてお松の名を呼びました。

お絹から呼ばれてお松は其の席へ出ますと、

「此方へお入り」

お松は肅やかに座敷の中に入りました。

そこでお絹はお松を市五郎に引合はせると、市五郎は速に膝を揃へて座を下り、

「これは、初めまして、わたくしが市五郎奴にござりまする、どうぞお見知り置かれて」

と非常に低く頭を下げましたからお松は其に準じて丁寧に挨拶をし「行き届かぬものでござりまする、何分宜しく……」

と両手を揃へてゐました。

近づきが終つてから市五郎は卑下と自慢とをこき交せて、自分が此の土地に長くゐる事だの、折助や人足、其れ等の間に於ける自分の

勢力が太したものであること、御支配をはじめ重役の間にて自分の信用が多大であるといふこと、そんな事を、それとなく云つてゐるが、お松には聞き苦しいほどであるのに、お絹は上機嫌で、

「お松や、お政治向きの事は別にして、その外の事なら此の人が何でも心得てゐるから、お前、何か頼みたいことがあるなら遠慮なく此の人に片肌脱いでお貰ひ」

とまで云ひました。

お松が自分の部屋へ歸つた後も市五郎は、お絹の許を辭して歸る模様がありませんでした。しばらく経つと、其の座敷が陽氣になつて、盃のやりとりはまだ進んでいつたやうであります。根岸へ引籠つた時分には一層慕はしく思はれたお師匠様が甲府へ來ると、またがらりと變つたやうに思はれるのがお松には淺ましい。誰とでも

容易く懇意になつてしまつて、あゝして氣を許すお師匠様の舉動がお松には歎かましい。

六

甲府の牢屋は甲府城の東に方つてお濠と境町の通りを隔て、相對し、三方はお組屋敷で圍まれてゐる。そのお組屋敷の東は御代官の陣屋になつてゐるのであります。

宇津木兵馬の囚はれてゐるのは、其の牢屋の中の一室で、それは六疊敷でありました。その六疊の中には兵馬と、その他に一人の奇異なる武士が囚はれてゐます。

この室の中の南と北は格子であります。東と西は羽目であります。

宇津木兵馬は其の羽目の方の一隅に寝てゐます。もう夜が更けてゐるから、牢の中は眞暗であります。

兵馬は寝入つてゐる容子だけれども、同室のもう一人の奇異なる武士は、まだ起きてゐて暗い中で何をかしてゐるやうです。

其の武士は三十前後の歳で、總髪にして髪を結んで後へ下げてゐます。

「うーん」

といふて苦し氣に呻るのは寝てゐる宇津木兵馬の聲で、それと同時に寢返りを打たうとするらしい。

「宇津木、苦しいか」

奇異なる武士は聲をひそめて斯う云ひますと、

「いや、別に」

と兵馬は、これも、ひそかに答へました。けれども其の返事は、苦しさを耐へてゐる返事です。

「もう一服、飲んで見るか」

と云つて奇異なる武士が、兵馬の枕許まで来て、蒲團の下を探ります。

「うーん」

と兵馬はまた苦し氣に呻りました。

蒲團の下から一包みの紙、それは薬と覺しいのを取り出して、奇異なる武士が兵馬の口許へ持つて來ました。

「まだ熱が高いな」

片手では薬の包を持ち片手では兵馬の額を押へました。

兵馬は寝てゐながら、口を開いて其の紙包みから薬を飲みました。

「ツレ水」

枕許の椀を取つて水を兵馬に飲ませました。兵馬は少しばかり起き直つて、コクリ／＼と其の水を飲みました。

「氣をつけて寝て居れ」

奇異なる武士は凝と兵馬の面を見つめてゐます。

火の氣のない牢屋の中の夜の事であるから、尋常ならば、何も彼も見えないのであらうけれど、此の奇異なる武士は、暗い中でも、よく物が見えるやうであります。

兵馬も亦相當に暗い中で物が見えるやうです。暗い牢の中に居つた爲に、自から眼がさういふ風に慣らされたものでせう。

兵馬が寝ついたのを見て奇異なる武士は、また以前の座へ立ち戻り何をしてゐるのかと思へば、紙を裂いて、しきりに紙燃をこしらへ

てゐるのであります。

自分の蒲團は兵馬に着せてしまつてゐるから、此の武士の横はるべきものはありません。半畳ほどの澁紙を布いて其の上で、紙燃をこしらへて、眠いといふことを知らないものゝやうです。

何十本かの紙燃をこしらへてしまつて、そこには丹早紙燃にすべき紙がありません。その時に此の人は座右の書冊、それは「安政三十二家絶句」といふのを手に取ると、その中の紙をメリ／＼と引き破り、幾枚か引き破つて其れをまた細かにし、細かにしてまた紙燃をこしらへ初めたのであります。

此の人が斯うして一心不亂に紙燃をこしらへてゐると、此の室の一隅、兵馬の寝てゐる隅とは違つた處の羽目板が微な音でトン／＼と二つばかり鳴りました。

羽目をドン／＼と叩いた音は、到底そのつもりでゐなければ聞けないほどの微かな音でありましたけれども、紙簾をこしらへてゐた奇異なる武士は直ぐにそれを聞きつけて、坐つたまゝ耳を其の羽目の合せ目の透間へ着けてしまひました。

「まだ起きてか」

これが次の室から聞えた小さな聲でありました。

「起きてる、起きて一生懸命に内職じや」

此方の奇異なる武士は其う答へてニヤリと笑ひました。

「さうか、病人は如何じや」

「熱は高いけれど、生命にかゝる事はあるまい」

「大事にするが宜い」

「折角養生中じや」

「それからな、今日は重大な音信を聞いたから、知らせる」

「左様か」

「今日は、おれの方に一人の新參があつた、それは、賈金遣ひとやらの罪で、この牢へ送られた男だが、その男から聞いた話だ」

「成程」

「長州では、いよく三人の家老を斬つて、幕府にお詫をする事になつたげな」

「ナニ／＼、長州で三人の家老を斬つて幕府へお詫をするぞ、そりや夢のやうな話だ、眞實とは聞かれぬ」

「ごうも、拙者に於ても信じきれぬのだが、その男の言ふ事を聞いて見ればマンザラ嘘とは思はれぬ、まゝ聞いて呉れ、祈ういふわけじや、長州藩では去年の八月、入京を禁せられてから、その許しを

願ふことゝ、それから例の七卿の復任を許されたいといふ事で様々に建言をするけれど更に御採用がない、この上は兵力を以て京都へ推参して手詰の歎願をする外はないと、久坂玄瑞、來島又兵衛、入江九一の面々が巨魁で、國老の福原越後を押立て、凡そ四百人の總勢で周防の三田尻から京都へ向つて出帆したといふものだ」

「うむ〜」

「その他に、久留米の神主で、あの慷慨家の眞木和泉が加はる、それから中山卿のお附であつた池、牧岡、大澤の三人——中山卿は長州で亡くなられたさうじや、大和の十津川から浪華を経て、長州へおゐでになつたが、其處で亡くなられたといふことじや、まだ十九か二十歳のお歳であらうに、お痛はしい事な」

「さうか、中山侍従は長州で亡くなられたか」

「御病氣で亡くなられたのか、または不慮の御災難であつたか、その邊は更にわからぬ、して其の中山卿のお附であつた池、牧岡、大澤の三人も加はつてよ、浪華へ着くと、同藩の仲間や諸藩の脱走が走せ加はつたから兵を二手に分け、一手は船で山崎から一手は陸を伏見へ登つて行つた、何しろ兵器を携へ、旗を立て、隊伍を亂さず上つて行くのだから、京都も騒がすには居られないのじや」

「成程、成程」

「それにまた國司信濃や益田右衛門介等が鎮撫を名として馳加はつて。とう〜御所へ押しかけてしまつた、其處で會津、一橋、薩州の兵を相手に、畏くも宮闕の下を戦亂の巷にしてしまつた」

「うむ〜」

「併し、さすが命知らずの長兵も諸藩の矢に攻められて、來島又兵

衛は討死する、久坂玄瑞も討死する、福原、國司、益田の三家老は齒齧みをしつゝ本國へ引上げるといふ事になつて、その後が長州征伐の結末は、毛利公の恭順と例のその三家老の首を斬つて謝罪するといふことで納まつたさうじや」

これ等の話し聲は極めて小さい聲で行はれましたけれども、平談俗語の通り、尋常に聞き且答へる事が出来ました。

話しをしてゐる間も見廻りの來る心配はありません。こゝの牢番もよく見廻りをするよりも、よく眠りたい方です。

「はゝあ、それは一大事じや」

と云つて、此方の奇異なる武士は考へ込みました。

「これで長州も寂滅」

異體の知れない話し相手も絶望したやうな聲で云ひました。

「いや〜、左様容易くは行くまいよ」

此方の奇異なる武士は存外平氣で答へました。

「如何して」

「長州の中にも二派ある筈じや」

「左様」

「さうして幕府に恐れ入つてしまふのも有るだらうが、中々それで承知の出來ぬ奴もある筈じや」

「左様」

「例の高杉晋作がこしらへた奇兵隊といふのがある、あの邊の處が黙つて引込んで居まいよ」

「成程」

「君は高杉を知つてゐるか」

「知らん」

「老物は知らん、若手では、あれが第一の男よ、あれのこしらへた奇兵隊といふのは他藩には、ちよつと類のないものじや」

「うむく」

さきには向ふが話しの主で此方が聞き手でありましたが、今度は此方が話し手で、向うが聞き手になりました。

「長州には奇兵隊があり、薩摩には西郷吉之助のやうなのがある、長州が本気で立てば薩摩は黙つてゐない、薩摩と長州が手を握れば天下の事知るべし」

「面白くなるのだな」

「それは面白くなるに定まつてゐるけれど、お互に籠の鳥だ」

「南條——」

こゝで兩人の話が暫らく途切れしました。話が途切れると獄舎のうちには晦くありました。此方の室では兵馬の寢息、彼方では同じ室に、また幾人ゐるか知らん、軒の聲を立てゝゐるのさへあるが、それを他にしては、いよく静かなものであります。

此方の奇異なる武士は、いよく近く羽目の透間へ耳をつけた時に

「南條——南條」

と向うから呼びましたが、

「手を出せ」

「うむく」

此方の武士は耳を着けてゐた處より一尺ばかり下の透間へ手を當てると、その透間からスーツと抜き取つたのは柄のない一挺の銃のやうなものであります。

「これは如何したのだ」

「今いふ賈金遣ひといふ男が、密とおれに呉れたのだ、同じ奴が、
だ一挺ある、鋸と鑿と小刀と三様に使へる」

「エライものを手に入れたな」

「それこそ天の與へ」

「有難いく」

と云つて此方の奇異なる武士は其の鏢を推し戴きました。

この時に牢屋の小使が咳をしました。もう大抵、話すべき要領は盡きたと見えて、それを機會に話は切れてしまひました。

牢屋の形式は嚴重でありましたけれど、中の見廻りはさほど嚴重なものではありません。

牢番の小使の老爺に金をやつて頼めば、大抵のものは調べて呉れま

す。羽目の間から物のやり取りや、小さな聲で話をする事などは、ほとんど自由です。

宇津木兵馬は此處へ囚はれて来る時に金を持つて来ませんでしたけれど、その後、誰ともなく金を差し入れて呉るものがあると思へその小使が二兩三兩と兵馬に手渡されます。それも五兩差入れたものがあるとするれば、そのうち二三兩づゝ誰か頭を刎る者があるらしくありました。

誰が差入れて呉れるのだから知らないけれど兵馬は其れが爲に、大へんに便宜を得ました。望みの物を買つてもらふ事も出来、同室の人に融通する事も出来ました。多分七兵衛の仕業でありませう。

その兵馬は不幸にして此の頃熱に胃されてあります。さうして枕が上がないでゐるのを、例の同室の奇異なる武士が介抱してゐました。

この奇異なる武士は兵馬よりは先に此の室に入れられておりました。それと同室して語つてゐるうちに、兵馬は此の奇異なる武士の奇なることを感せずには居られません。

今日は少し快かつたから起きて見ました。夜は早く床に就きました。が、よく眠れました。夜中になつて、ふと妙な音が耳に入りました。から目を覺まして、音のする方を見て、我知らず身を起しました。兵馬は半身を起して、怪し氣な音の耳ざわりになる處を見ると、同室の奇異なる武士が格子によりかゝつて仕事をして居るのを認めました。

その奇異なる武士は、何かを以て、極めて小さな音を立てながら、牢の格子を切つてゐるとしか見えません。言葉を換えて云へば牢破りを企てつゝあるとしか見えません。

餘りの事に兵馬は、蒲團を蹴つてよろめく足を踏み締めて立ち上がりました。

「南條殿」

兵馬はよろめきながら近寄つて、牢の格子を切つてゐる奇異なる武士の手を押えました。

「宇津木、起きては可かん」

奇異なる武士は、兵馬に押えられても別段に驚きはしません。

「南條殿、何をなさる、軽々しい事をなさるな」

兵馬は嗜めるやうに云ひました。

「君の知つた事ではない、身體に悪いから寢て居給へ」

南條と呼ばれた奇異なる武士は兵馬の手を取つて、牢の格子の角の隅をさぐらせました。兵馬は其處へ手を當て、見ると、何かの刃物

でズーツと横に筋が切り込まれてあります。その切り込みはまだ其んなに深くはありませんでしたけれど、退引ならぬ破牢の極印である事は確かであります。

「あゝ、大膽な事」

と云つて兵馬は嘆息しました。

「二番の室でも、これをやつてゐる、成敗共に我々が引受けるからまあ／＼安心して寝て居給へ」

奇異なる武士は騒ぐ事なく、兵馬を和めて、またも静かに其の切込へ刃物を入れました。その刃物といふのは前夜隣室の羽目の隙間から手に入れた鑢様のものであります。兵馬は、その上に彼是と云ひませんでした。それは餘人ならぬ此の人が、斯く決心して事をはじめた上は、今更自分が是非を論じても駄目だと思つたからであります。

す。

「世が世ならば此んな事をしたくは無いが、時勢を聞いて見ると如何しても此處に安んじては居られぬのじや、文天祥が天命に安んずるこそ丈夫の襟懐ではあるが、盗人の屋尻を切るやうな真似をせにやならぬのも時節、宇津木、君だからとて、さう／＼正直に冤の晴れるのを待つても居られまい、上に名判官ある世には獄屋のうちに白日の照す事はあらうけれど、こゝらあたりで其れを望むは、百年富士川の流れが澄むのを待つのと同じこと」

南條と呼ばれた奇異なる武士は、斯う云ひながら静かに格子の角を引いてゐるのであります。

兵馬は是非なく寢床の方へ退きました。兵馬は蒲團を引被ぎながら格子の角に引かれる鑢の微かな音を聞いてゐました。

兵馬は正直な心で、今まで待つておりました。己れの疚しい事さへ無ければ、泰然として待つてゐるうちに、天は必ず己れを助くるものだと思つておりました。非法に囚はれたけれど、自分は法を犯して其れを逃れやうとはしませんでした。併し今といふ今、その心に動搖が起らないわけには行きません。

七

駒井能登守は例の洋風に作つた一間に籠つて此の頃は役所へも餘り出勤せず、また訓練も暫らく他の者に任せて置きました。此の一間に籠つた能登守は、人を諸方に遣はして土を集めさせてゐます。自分も亦、思ひ立つたやうに外へ出ては土を集めた來るので

ありとます。

集めた土を分析したり、また火にかけたりして験す事に殆ど寢食を忘れる位の熱心でありました。

能登守が預かつて城内の訓練場で扱つてゐる虎砲十二磅砲といふやうなのは、伊豆の江川の手で出来たものであります。伊豆の江川は能登守と同じく高島四郎太夫を師とするものであります。

能登守は甲府へ赴任の最初から、此處へ一つ江川と同じやうなものを建てたいと思つてゐたのであります。それは自身で研究して自身で造り出した砲でなければ満足の出來ないほごに、能登守の砲術の愛好心は嵩じてゐるのであります。

江川太郎左衛門が伊豆の葦山に立てたのは有名なる反射爐であります。江川が其の反射爐を立てる時に最も苦心したのは煉瓦でありま

した。煉瓦を作る土でありました。當時、外國から取り寄せる事の出来ない爲に江川は先づ煉瓦から焼いてかゝらねばなりませんでした。その高熱に耐へる煉瓦を焼くべき土から求めてかゝらねばなりませんでした。

江川は漸くにして其の土を天城山の麓と葦山附近の山田山といふ處から探し出して、煉瓦を作りました。その煉瓦は立派なものでありました。今日の進歩した耐火煉瓦に劣らぬほどの煉瓦を、當時獨創的に作り出したものであります。耐火試験によつて千七百度の高熱に耐へるといふ事であります。千七百度の熱度は白金の溶解度であります。

能登守は江川の其の苦心を見もし聞きもしました。土を集めて其れを調べてゐることは、やはり同一の目的の爲めと見て宜いのであります。

ます。その研究の間は誰人をも此の室に入れる事を避けて眠ることも、ほとんど此の椅子と卓子とに凭つたのみでありました。疲れた時は夜となく、晝となく、うつら／＼と眠るのであります。覺めた時は書物と實物とを向うに首つ引でありました。今も疲れて能登守は、椅子に深く身體を埋めて眠つてゐました。その時に扉が靜かに開いて、

「殿様」

扉の前に立つてゐるのはお君でありました。

お君は、大名や旗本の家へ仕へる女中のやうに拵へてゐます。お松とは年の頃合ひは同じ位でありましたけれど、お松は肉附のよい、どこかに雄々しい處のある娘でありました。お松に比べると、お君は、もう一層色白で、繊細で、沈んだ美しさを持つてゐました。

「殿様」

と云つて、そつと扉を明けたお君は、椅子に凭つてスヤ／＼と眠つてゐる能登守の姿を見て、嫣然として、音を立てないやうに其の傍へ近づいて行きました。

能登守は、よく眠つてゐてお君の入つて來たのに少しも氣がつかません。お君は、能登守の椅子に近い處まで來て、主人の寝顔の前に立つてゐました。

この數日、主人の髪も亂れてゐるし、それに寝てゐる面にも寝れが見えてゐました。心配さうに見てゐたお君は、

「殿様」

やゝ大きい聲で再び呼んだ時に能登守は眼を覺まして、

「あ、お前か」

と云つて莞爾として、敢て咎める事をしませんでした。お君が給仕として此の室に入ることを許されてゐる唯一の者であります。

「よく、お寝つておゐで遊ばしました」

お君は斯う云ひました。

「あ、ついうと／＼と寝入つてしまつた」

能登守は椅子に埋めた身體を少しばかり起さうとしました。

「あの、お客様でございませうが」

とお君が云ひました。

「客」

能登守は小首を傾げて、

「言うて置いた通り、この仕事をはじめてからは、大抵の客には會ひたくないのじや」

「強つてお目通りを致したいと、そのお客様からのお願ひでございます」

「それは誰じや」

「女のお方でございます」

「女の……」

「はい、神尾主膳様の御別家のお方と申すことでござりまする」

「は、あ」

駒井能登守は、直ぐにそれと領く處のものがありませんが、

「どのやうな用向きか知らん、わしは會ひたくない、誰か會つてもらひたい」

會うことを多少迷惑がるやうであります。

「それでも殿様に、直にお目通を致さねば申上げられない事なのだ

さうでございます、それが爲め、小島様も服部様も、わたしに殿様へお取次申して見るやうに、お頼みでございました」

「はてな」

能登守は、その晴やかな面を少しく曇らせました。

「兎も角、彼方へお通し申して置くがよい、暫らくの間お待ち下さるやうにお断りをして」

「畏まりました」

「それから、お前は、わしの羽織だけを此處へ持つて来て呉れるやうに」

「畏まりました」

お君は旨を受けて、此の間を出て行きました。能登守は其の後で腕を組んで考へ込んでおりましたが、

「は、あ、さうじや、忘れてゐたわい、例の神尾が嫁を貰ひたいと云ふ事であらう、あの一件で、例の婦人が出向いて来たものと見ゆるわい——筑前殿からも内談があつたのだが、あれは、まだ拙者には解せぬ事がある故に、何とも返事をせずに置いた、事實、神尾があの縁組を本氣にするか、それとも一時の策略か、その邊を、もう少し確めて見ぬ事には」

駒井能登守は、こんな事を思ひつきました。さうして獨言のやうに「併し神尾は小人じや、萬一拙者が故障を云へば屹度、拙者を恨むに違ひない、恨まれるのは、よくないが、も知らぬ處女が、悪い計略に落ちるやうじやと氣の毒の至り」

こんな事を胸に問ひ答へてゐる時にお君が羽織を入れた黒塗の箱を捧げて來ました。能登守が筒袖の羽織の紐を解くと、お君は其の後

に廻りました。それを黒の紋付の羽織と着替させて、お君はその筒袖の羽織を疊みかけました。

能登守は着替えた羽織の紐を結ぶと、お君は、

「殿様、あのお髪が亂れておゐで遊ばします」と云ひました。

「うむ、其れもさうじや」

お君は筒袖の羽織を疊んでゐた手を休めて鏡臺を卓子の上に立てました。その鏡は隅の棚の上に置かれてあつた、これは洋式のものではなく、磨き上げた丸い鏡でありました。

お君は斯うして能登守の爲に亂れた髪を撫でつけながら、その鏡にうつる殿様のお面を見ると、恥かしさで手先がふるへて、自分の面が火のやうにはてるのに堪へられませんか。

駒井能登守は客間でお絹と對座して居ります。

それは日本式の客間で、二人の間には桐の火桶が置いてありました。お絹は、いづぞやの甲州道中のお禮などを述べました。さうして後に、お絹が言ひ出した事は案の如く、神尾主膳の此度の縁談の事でありました。

「神尾も、あゝして置きますと我儘が募つて困ります、わたくしが参りましたのを、よい折に是非此の縁談だけは纏めて歸りたいのでございます、筑前様にも、この事を大へんおよろこび下さいました」——斯ういふ話でありました。能登守は其れを聞いて、「それは慶たい事でござる、左様な慶たい事を何しに拙者に於て異議がござりませう、して先方のお家柄は」

穩かに斯う尋ねたのでありました。

「先方は、有野村の藤原の伊太夫の一の娘にござりまする」

「有野村の伊太夫の娘」

「左様でござりまする」

「成程」

能登守は暫らく考へてゐる風情でありましたが、言葉を次いで、

「あれは聞ゆる舊家でありましたな」

「仰せの通り、家柄では多分、此の甲州に並ぶ者が無からうとの事でござりまする」

お絹はやゝ誇りがほに答へました。

「その通り、伊太夫は拙者もよく存知の間柄、その家柄もよく承はつてゐるが、その息女にはまだお目にかゝらぬ」

「常には、あまり人中へ出ることさへ嫌ふやうな娘でありましたが此の度の縁談はその當人が進みましたものでござりまする」

「其れは何よりの事、この縁談の假親は何誰でござりまするな」

「假親と仰せられまするのは」

「神尾家と藤原家とは聊か家格に違ひがござるやうじや、藤原家の息女が神尾家へ御縁組致すには、假親をお立てあるが順序と考へられるが」

「恐れながら、家格の違ひと仰せでござりまするが、あの伊太夫が家は、御承知の通り、葛原親王以來の家柄と申すことでござりまする、それに権現様以前より苗字帯刀は御免、國主大名の系圖にも劣らぬ家柄でござりまする故に神尾家に取つて釣合ぬ格式とは存じませぬ」

お絹は、斯う云つて能登守から家格の相違といふ事を云はれたのに辯解を試みました。

「いや／＼其の事ではない、凡そ旗本の家が縁組をするには同じ旗本のうちか、或は大名の家よりするか、さもなき時は然るべき假親を立てるが定め、その邊は御承知でござりませうな」

「それは……」

と云つてお絹は、やゝあはてました。

「まだ其れまでには運んで居らぬのでござりまする……」

お絹が、其れに就て尙ほ何をか辯明しやうとするその言葉の鼻を押へるやうに能登守が、

「左様ならば取敢ず其の事をお取定めあつて然るべく存じまする」と云つてしまひましたから、お絹は二の矢が次げないやうになりま

した。

「御親切のお心添を有難く存じまする、よく主膳にも申聞けました上で……」

お絹は斯う云つて辭して歸るより外はありません、能登守の言分は正當であるにしても、折角使者に來たお絹にはその言分が快い感じを與へる事が出來ませんでした。況してやこれが神尾主膳の耳に傳はる時は憎悪となり怨恨と變ずる事は目に見えるのであります。

八

神尾主膳は其の晩一人で躑躅ヶ岡の古屋敷を訪ねました。酔つてゐるものゝやうに足許がふら／＼してゐます。

「机氏、机氏」

いつも龍之助のゐる座敷へ、そのふら／＼した足どりで入つて來たけれど、其處に龍之助が居ませんでした。

「龍之助殿、何處へ行つた」

と云ひながら、其處へドカリと坐つてしまひ、それから醉眼を据えて室内を見廻しました。

例の通り、丸行燈に火が入つてゐるにはゐたけれども、それは今や消えなんとしてゐる處であります。

「忌に暗い火だ、明るくない燈火だ、もつと明るくなれ」

主膳は燈火に向つて、こんな事を言ひました。その舌の繾繾鹽梅を見れば、可なりに酔つてゐる事がわかります。

「誰も居らぬか、誰ぞ來い、あの燈火をもつと明るいやうに致せ、

こんなにして燈心を掻き立てるが宜い、燈心を掻き立てさへ致せば火は自づと明るくなるのぢや、早う致せ、誰も居らぬか、誰ぞ來い來い」

怪しげな呂律で取り留まりもなく云ひました。さうして酔ばらひ並に頭をグタリと下げたり、怪しげな手つきをして、其の手を直ぐに膝の上へ持つて来て、狛犬のやうな形をしたりしてゐました。

「うむ、よし、誰も來ないな、來なければ此方にも了見がある、お松、お松、いや女中共、女中共は居らぬか、其方共は主人の言附を聞かぬな、其方共まで此の主膳を侮ると見ゆるな」
神尾主膳は、また醉眼を据えて室内を睨め廻したが、

「は、は、は、は」
と高笑ひをしました。

「違つた、違つた、こゝは古屋敷であつたな、成程、こゝは躑躅ヶ岡の古屋敷じや、こゝには誰も召使ひは居らぬのぢや、屋敷の中には無暗に物を斬りたい奴が一人ゐて、屋敷の外には法性狐がある、その外には誰もゐない、居ない處へ物を言ひつけた、これは拙者が悪い、ごれ、太儀ながら御自身に立つて、あの燈火を掻き上げにやならぬ、燈火は暗し數行虞氏が涙――」

こんな事を言ひながら神尾主膳は、ふら／＼と立つて行燈の傍へ來て、燈心を掻き上げて火影を明るくして、覺束なくも油をさへ差加へましたから、四邊は急に明るくなりました。

「は、は、は、は、現金なものぢや、燈心を掻き立て、油を差したら火が明るくなつたわい、火が明るくなつたから四邊の物がよく見えるわい、よく見えるけれども机は居らぬわ、龍之助が姿は見えぬわ

い、はて、この夜中に、何處へ行つた、眼の見えもせぬ癖に、は、
、眼が見えぬから夜と晝の區別がつかず何處ぞへ彷徨出したか
な』

神尾主膳には酒亂の癖があります。併し此方へ来てからは酒亂の癖
が出るほどに酒を飲みませんでした。主膳もこれだけは多少謹慎の
心があつたのであります。それに如何したものか今宵は其の酒亂に
近いほどに酒を過して来たものゝやうであります。

室内が明るくなると共に、主膳は四邊を、また見廻しはじめました。

「刀もある、槍もある、敷物もある、屏風もある……茶道具もあれ
ば煙草盆まである、襖、唐紙……」

こんな事を云つて室内を見廻した主膳の醉眼がトロリとして室の片
隅の長持の上へ落ちました。

「あ、あれだ、誰も居らぬと思つたのは此れも間違ひ、あの中に一
人の男がある、口の利けない男がある、今それを引き出して玩弄に
するのだ」

主膳は、またふくくとして立つて長持の傍へ行きました。

「幸内、長持の中に居る幸内、これへ出るよ、そのやうに長持の中
に隠れてばかりゐては窮屈であらう、貴様も若い身空じや、さう長
持の中にはかり隠れてゐずと、些とは廣い處へ出て来いよ、壺中の
天地といふ事もあるから、それは長持の中も宜からうけれど、若い
のにさう隠れてばかりゐては命の毒じや、それこそ長持が無いぞ」
主膳は刀を提げて長持の中へ片手を入れました。その長持には蓋が
してありません。蓋をしてない長持の中へ主膳は手を入れて鼠を吊
し出すやうな手つきをして、その襟髪を取つて引き立てたのは幸内

であります。
 可哀相に幸内は今だに此の長持の中へ入れられてあつたのであります。袋は彼せられてゐないけれども瘦せきまつて居りました。兩手は前に括られてゐました。兩足は揃へて固く縛られてありました。争うにも力は盡き果て、物を言はうにも聲が立ちません。ズル／＼と長持の中から幸内を引張り出した神尾主膳は、それを燈火に近い處へ持つて来て、

「はゝゝゝ」

主膳は幸内を其處へ引き倒して置いて、

「幸内、其方に窮命をさせて、拙者は氣の毒に思ふ、其方には怨みも憎みもないのじや、これと云ふのは名刀の祟り、小人罪無し珠を抱いて罪ありといふ事がある、幸内罪無し刀を抱いて罪ありといふ

のじや、伯耆の安綱が悪いのじやから不祥せい……それからまたお前の主人の伊太夫の娘、氣の毒ながらお化のやうな娘、あれを拙者が嫁にしたいと云うのは、抱いて寝たいからではないぞ、いとしい戀しいと思ふからではないぞ、恥かしながら拙者は今手許が不如意じや、伊太夫の財産に惚たのじや、娘には戀無し、財産があるから戀ありと云はゞ云ふものよ、はゝゝゝ」

主膳は憎らしい毒口を吐きかけました。幸内の口は聲の立てられないうやうに薬を飲ませられてしまつたけれど、其の耳は、この毒口を開き取ることに不足は無いと見えます。

幸内は主膳の言葉を聞くと、其の首を烈しく振つて苦しげな表情をしました。その有様を、主膳は、やはり醉眼を張つて見てゐましたが、

「まあ聞けよ、悲しい事に九分まで運んだ此の縁談が際どい處で壊れさうじやわい、外でもない其れは駒井能登奴が爲す業じや、あの小賢しい駒井能登守が邪魔をして、惜しい縁談が壊れかゝつたわい、残念じや、腹が立つて堪らぬわい」

こゝに至つて神尾主膳は、正銘の酒亂になつてしまつたやうであります。

「癪に觸つて腹が立つて堪らぬ故、これから其方を駒井能登奴に見立て、この腹が納まるほど、弄つて弄つて、弄りのめしてやるから有様思へ」

神尾主膳はブル／＼と身を慄はして、突然、幸内の襟髪を取つて引き立て、

「やい、駒井能登守、この神尾主膳を何とするのじや、主膳を何と

心得て、如何して見やうといふのじや、えい、小癪な」

力を極めて前へ突き倒しました。突き倒されて幸内が突んのめるのを直にまた引き起して、

「瘦せこけた駒井能登守、口の利けない駒井能登守、突き倒されて直に突んのめる駒井能登守、この神尾主膳を何とするのじや、えい腹が立つて堪らぬ、見るも胸が悪くなるわ、やい」

それをまた力を極めて横へ突き轉がしました。突き轉がして置いて直にまた引き起し、

「前へ突き倒せば前へ倒れる駒井能登守、横へ轉がせば横へ轉がる駒井能登守、さあ、この次は如何して呉れやう、水を食はせて呉れやうか、火を浴びせて呉れやうか、如何すれば此の腹が癒える事じや、やい」

こんな事をしてゐるうちに神尾主膳の酒亂がだん／＼嵩じて來ました。残忍性が增長して來ました。

幸内の襟髪をもつてズン／＼と此の座敷を引ずり出しました。

座敷を引ずり出して戸を明けると椽側であります。

その椽側から裏庭へ、主膳は幸内を引き下しました。自分は足袋跳足で、庭へ飛び下りてゐました。

今度は土の上を引いて／＼、古井戸の傍まで引張つて來ました。

恐らく酒亂が、こんな風に嵩じると、最早自分で自分の爲す事を知らないのでありませう。野獸のやうな残忍性が、加速度を以て加はつて來るものごしか思はれません。

古井戸の流しへ幸内を引摺つて來て、そこへ突放すと神尾主膳は車井戸の綱へ手をかけてキリ／＼と水を汲み上げました。

「汝れが／＼」

主膳は汲み上げた水をザブリと幸内の上から浴びせました。

手を縛られ、足を縛られた幸内は、水を浴びせられて二尺ばかりも飛び上がりました。飛び上がつてまた倒れました。

神尾主膳は、心持宜かりさうに高笑ひして、また二杯目の水を汲みにかゝりました。

「は／＼／＼」

二杯目の水を汲み上げてまたザブリと幸内の面のあたりから浴びせました。幸内は一尺ほど飛び上がりました。

廣い古屋敷の事で外に誰も居ませんから、此の場へ來るものはありません。こゝにゐる人の爲に衣食の世話をする人は、この近所の農夫の家族でありましたが、それは一定の時を決めて來る外には、此

處へ寄り付きませんでした。

「ごんな目に遭されても幸内は遂に一語をも發する事が出来ません。主膳は此の残忍性の面白味を帯びた遊戯の爲に三杯目の水を汲み上げて、

『は、は、は、これは信玄が軍用に用ひた用心水じや、なか／＼冷たい水だ、指を入れると指が切れるやうな水だ、信玄は此の水の底へ黄金を沈めて置いたとやら、それで水が此んなに冷たい、さあ此の冷たい水を、もう一杯飲め』

釣瓶を抱て、その三杯目の水を幸内の頭から、浴びせやうとして神尾主膳はよろ／＼とよろけました。幸内に浴びせやうとした水を三分の一ばかり自分の懐の中へ浴びせてしまひました。『あッ、冷たい』

主膳は釣瓶を取り落すと、釣瓶は井戸の中へ落ちました。やり損なつた主膳は、まだ釣瓶の綱の手を放さないで四杯目の水を汲みにかかりました。諸手をかけてウン／＼と力を入れて手繰つた時は、自分のしてゐる残忍其ものゝ興味をも忘れてゐるやうであります。可哀想に幸内は、主膳が酒亂の犠牲となつて弄り殺しにされなければ納まらないのでせう。弄り殺しにした上に其の屍骸を粉々にしなければ納まりさうにはありません。

主膳は悪魔の呻るやうに、ウン／＼と力を籠めて綱を引きました。力餘つて釣瓶は井戸車の上まで刎上げてしまひました。井戸の水は瀧が巖に碎けるやうに一時にバツと飛び散りました。

「うーん」

その途端に神尾主膳は、如何したハツミか二三間後へ撞と尻餅を搦

いてしまひました。釣瓶の繩が切れたのです。釣瓶は凄じい音を
 て單獨で井戸の底へ落ちてゆきました。ハヅミを喰つて尻餅を搗い
 た神尾主膳は、暫く起き上がる事が出来ません。

「神尾殿、神尾殿」

やゝ暫らくして神尾主膳は何者にか呼び醒まされました。

「あ」

主膳は氣が付いて見た時に、自分の面の上へ小田原提灯を差しつけ
 てゐる者がある事と、また自分の身體を後から抱上げてゐる者があ
 る事を知りました。

「神尾殿、氣を確にお持ちなさい、拙者は小林でござる、小林文吾
 でござる」

後から抱上げてゐるのが斯う云ひました。それは即ち劍道の師範役

小林文吾であります。小林はやはり仲間のやうな扮装をして看板の
 上には半合羽を着て、脇差を一本だけ差して居りました。

「別に怪我をしてゐるわけじや無えんだ、たゞ釣瓶の繩が切れたか
 ら、其れで尻餅を搗いて氣を失つたゞけなんだ」

小田原提灯を差しつけて斯う云つたのは、其れは宇治山田の米友で
 ありました。

やつと氣が着いた神尾主膳、元より別段に斬られたといふわけでも
 なし、突かれたといふわけでもないから、直ぐに正氣に返つて、

「これはく、小林文吾殿か」

この時には、主膳も酒亂の狂から醒めてゐました。さうして見ると
 何となく定まりの悪いやうな心持にもなり、また今ごろ小林師範が
 如何して此んな扮装をして此處へ來合せたかといふ事も疑問になら

ないではありませんでしたけれど、

「面目ない事じや、實は少々酔が廻つたものだから、酔醒めの水を飲まうと、水を汲みかけて此の狀じや——して貴殿方は如何して此處へ」

「我々はちと尋ねる人があつて、その人を尋ねて此のあたりまで来た處、つい其の人を見失うて……」

「それはく、兎も角、あれまで」

神尾主膳は立ち上がりました。先に立つて小林を屋敷の中へ案内しやうとするど、

「此りや如何したんだ、エ、こゝに男が一人縛られて倒れてるが、此りや如何したんだ」

と云つて、けたましく叫んで提灯を振りかざしたのは米友であり

ます。

「あゝ、そりあ氣狂ひじや、養生の爲にさうして水を浴びせてやるのじや」

神尾は憎さうに云ひ捨てました。

「幾ら氣狂だつてお前、この寒いのに井戸側へ水を掛けて置きつ放しにしたんじやあ凍え死んでしまふじや無えか」

米友は同情しました。神尾は米友の方を、ちつと見たゞけで取り合はずに、小林に向ひ、

「貴殿方が尋ねる人といふのは、そりや如何なる人でござるな」

「外ではござらぬ、この頃市中に評判のあの辻斬の曲者を尋ねんが爲に」

「成程」

「夜更から曉方へ掛けて、斯うして扮装を變へて毎夜のやうに尋ねて見るが、いつぞ出會し申さぬ、然るに今夜といふ今夜、柳小路で見かけた怪しの者、見えがくれに後をつけると、要法寺の墓地へ入つて行衛が知れず、引返さうとした時に、豫て牒し合せて置いた此の男、同じやうな怪しい者が、たつた今古城の方へ行つたと申す故二人で後追ひかけて、たしかに姿を認めたのが當屋敷の裏手、喜び勇んで駆つけて見れば、それは尋ぬる曲者ではなくて、御主人の神尾殿が此の體たらく」

小林文吾は一通りの事情を話して苦笑ひしました。

「それは〜」

神尾は其れを聞いて何んとなく臍に落ちないやうな心持で、例の座敷の傍へ来て椽側から覗いて見ると最前、散々問題にした丸行燈の火は消えてしまつてゐましたから中は眞暗でありました。

幸に米友は小田原提灯を持つてゐました。頼まれもしないのに、幸内を擔いでその椽側の處までやつて来てゐました。

主膳と幸内とを座敷の中へ送り込んで、小林文吾と米友とは此處を辭して外へ出てしまひました。

そのあとで、主膳は座敷の中で寢轉んで、詩を吟じて見たり新内を語つたりして見ましたが、やがて思ひ出した様に起き直りました。米友が提灯からうつした行燈には火が入つてゐました。その行燈の下に幸内は水を浴びせられたまゝで抛つて置かれてありました。主膳は其の傍へ寄つて来て、

「幸内、お前にも大ぶ苦しい思ひをさせたな、これ許して遣らう、繩をゆるめて遣はずぞ」

と云つて縛つてある幸内の手首の繩の結び目を解きにかゝりました。酒亂は止んだらしいけれど、酔はまだ醒めてゐないやうであります。

遂に面倒になつたものと見えて主膳は小柄を抜きました。その小柄でブツリと繩を切つてしまひました。

斯うして手首の繩を切られたけれど、幸内はグツタリとしてゐました。

「はゝゝゝ、大人しいな」

と主膳は笑ひました。それから同じ小柄をもつて足首の繩をブツリと切りにかゝりました。繩は足首の中に食ひ込んであつたのを切つてしまふと、幸内の兩足も自由になりました。

兩手も兩足も自由になつたけれど、幸内はグツタリとして動きました。

ん。それは其の筈です、三杯目の水を浴びせられやうとする時分から幸内は絶息してゐたものでありましたから。

「はゝゝゝ、永らく窮命させた、これで許して遣はす、何處へなど勝手に出て行け」

神尾主膳は斯う云つて、暫らく幸内の姿をながめてゐたけれど、幸内は更に動くことをしませんでした。

「はゝゝゝ」

と主膳はまた發作的に笑つて、そのまゝゴロリと横になりました。横になると新内の明烏を處まんだら摘んで鼻唄にしてゐるうちにグウ〜と寝込んでしまひました。

主膳の鼻が漸く高くなつた時分に幸内の身體が少しばかり動きまじた。絶息してゐた幸内の眼に白い雲のやうなものがかゝりました。

幸内は夢のやうに手を振りました。それが氣の着いたはじめで、それから自分の事を覺るまでには、なほ幾分かの間がかゝりましたけれど、結局、幸内は我に返りました。

我に返つた最初に、行燈の光がボンヤリと眼へ入りました。それよりも幸内が嬉しくて嬉しくて堪らなかつたのは、いつの間にか我が手が自由になつてゐた事のわかつた時であります。

それがわかると勇氣が一時に十倍百倍し、さほど弱つてゐた身體で這起きたのが不思議な位でありましたけれど、這起きて見るとこれも嬉しや、足も自由になつてゐました。

見れば行燈の影に一人の侍が寝てゐます。

幸内はゾツとしました。永らく己れを苦しめて苦しめ抜いた極悪人といふ憎悪がひら／＼と起りましたけれど、その憎悪は復讐といふ

處まで行かない先に恐怖を以て占領されてしまひました。

何事を置いても此の場を逃げなければならぬ。逃げ出さなければならぬといふ考へが、前にも後にも犇々と迫つて來たから、幸内は縁側の方の戸を押し開きました。一生懸命で戸を開いて縁側へ出て、縁側から轉げ落ちて、やつと起き直つて、庭を駈け出してまた轉びました。また轉んでまた起きました。その有様は後から鬼に追はれて足の辣んだ夢を見てゐるやうな形でしたけれど、別に何者も追ひかけるものではありません。

神尾主膳が寢込んでしまつて、幸内が轉がり出して、いくらかも經たない時に、机龍之助が歸つて來ました。

例の通り宗十郎頭巾を被つてゐましたが、いつも蒼ざめてゐる面が一層蒼ざめてゐました。

「神尾殿、神尾殿」

行燈の下へ来て寝てゐる神尾を呼び起した時、龍之助は胸のあたりを氣にして居りました。

「やあ、机氏、何處へ行つてゐた」

神尾主膳はやつと云つて起き直りました。

「夜遊びに行つて来た」

と云ひながら龍之助は片手で長い刀を横に置いた時に、神尾主膳は龍之助の例の胸のあたりを見て、

「やー」

神尾は悸として少しく身を退かせました。

胸のあたりを氣にしてゐたといふ龍之助は、その羽織の紐の少しく下の方にブラ下がつてゐる白い物を右の手で持つて、左は羽織を押

えて、無理にそれを抜き取らうとするのであります。

神尾が見て悸としたのは、其の龍之助の抜き取らうとしてゐる白い物が、人間の手のやうに見えたからであります。人間の手のやうに見えたのではない、正に人間の手に違ひないからであります。

「龍之助殿、一體そりや如何したのだ」

主膳も、ほどく身の毛が堅立つやうでありました。

「固く……むしり着いて……どうしても取れぬわい」

龍之助は、さう云ひながら人間の手を羽織の襟から抜き取らうとして、なほも力を入れたのであります。

「如何したのじや」

主膳は再びたづねました。

「これが……此の手足が……」

龍之助は、自棄に力を入れて其の羽織にブラ下がった人間の手を引きました。

「斬つたのか、人を斬つたのか……」

主膳は面を突き出して其の手首を篤と見届けやうとして、

「取れないのか」

「取れない」

「どれぐ」

「斬つた途端に此處へ飛びついたから、また斬つた、手首だけ残して倒れた、その手首が、此處に密着いて離れない」

「拙者が離して見てやろう」

神尾主膳は龍之助の胸の前へ来て氣味悪さうに、その手首にさわりました。

「こりや女の腕では無いか」

「あゝ、女の腕よ」

「女を斬つたのか」

「うむ、女を斬つた」

「何故斬つた、何處で……」

それから、やゝ暫らく古屋敷の中は寂然としておりました。

「はゝゝゝ、拙者に其の駒井能登守とやらを討てと云はれるのか」

机龍之助の斯う云つに聲が、低いけれども座敷の隅に透りました。

「叱ッ、静かに」

それは神尾主膳が怖れるやうに抑えたのであります。

それから小さい聲で話が續きました。時々は聲が高くなつたけれどもよくは聞取れません。暫らくして神尾主膳の、

「や、幸内が居ない、幸内が逃げた」

と叫ぶ聲が聞えました。

幸内を逃がしたのは自分が逃がしたのである。主膳は今まで自分のした事に気がつかないでゐたと見えます。

それから急に騒ぎ立つて雨戸を開けて見たり、庭へ出て見たりするやうでありましたけれども、結局逃げた幸内の行方がわからない。さうなると神尾主膳は静止として居られないほど、狼狽をはじめましたやうでありました。

主膳は周章しく歸りました。主膳が歸つての跡は龍之助が一人でありました。

「神尾主膳はおれに向つて、駒井能登守とやらを討つて呉れといふ神尾の頼みを聞いてやらにやならぬ義理もなければ、駒井能登守を

討たにやならぬ怨みもない、おれは人を斬りたいから斬るのだ、人を斬らねばおれは生きてゐられないのだ——百人まではキツト斬る百人斬つた上は、また百人斬る、おれは強い人を斬つて見たいのじやない、弱い奴も斬つて見たいのだ、男も斬つて見たいが、女も斬る、あゝ甲府は狭い、江戸へ出たい、江戸へ出て思ふさまに人が斬つて見たいわい、あゝ、人を斬つた心持、その時ばかりが眼の明いたやうな心持だわい、助けて呉れと悲鳴を揚げるのをズンと斬る、あゝ胸が透く、堪まらぬ」

龍之助は座の左を探つて手柄山正繁の刀を取り上げました。

「今宵も此れで斬つた、女だ、正しく女の聲で助けて呉れと泣いた。若い女であつたか、年を取つてゐたか、そりやわからぬ、綺麗な面をしてゐたか、醜い面をしてゐたか、それもわからぬ、若い女であ

つたら何とする、また美しい女であつたら何とする、おれはたゞ斬ればよいのじや、斬りさへすれば胸が透くのだわい、聲をしるべに斬つた途端に、縋りついて泣いたからまた斬つた、それで此の片腕がおれの羽織にしがみついたなりに残つたわい」

龍之助は其刀に残る血の香に顫えつくやうでありました。身體も亦ブルブルと顫えて、手に持つた刀から水が飛ぶやうであります。

「以前は強い奴でなければ斬りたくなかつた、手ごたへのある奴でなければ斬つて見やうと思はなかつた、この頃になつては、弱い奴を斬つて見たい、助けて呉れと泣く奴を斬るのが好きになつたわい、あゝ喉咽が乾くやうに人が斬りたい、あの幸内とやらは逃げたさうな、長持の中の窮命人は逃げたさうな、せめて彼れでもゐたら斬つて見たい、一人では斬り足らぬ、如何してまた今宵はこれほどに人が斬りたいのだ」

龍之助は本當に乾いた咽喉を鳴らしてゐるのであります。それは血を飲みたいが爲に乾いた咽喉であります。

「あゝ、甲府は狭い、一夜のうちに二人と人が斬れぬ、江戸へ出たい、江戸へ出れば、好みの人間を好むやうに斬ることが出来るのだ、今宵斬れば明日の晩は遠慮せにやならぬ甲府の土地には居られぬ、江戸へ出る工夫は無いか、江戸へ出て思ふまゝに人を斬らねばおれは生きては居られぬのだ」

彼は狂する者のやうに刀の血の香ひを嗅いでゐるのであります。

その翌朝、甲府の市中がまた沸き立ちました。それはまたしても辻斬があつたからであります。

その騒ぎ方と驚き方と怖れ方が、今までよりも一層甚だしかつたのは、斬られたのが女であつたからであります。

今まで斬られた者のうちに女は一人もありませんでした。昨夜斬られたのは女でありましたからです。

それは八日市へ呉服屋を出して、いくらも経たない若夫婦でありました。その女房が良圓寺の門の前で斬られました。それは此の曉方の事でありました。

この呉服屋の小店の若い夫婦の間には、今年生れの可愛い男の子があつて、虫のせいかその夜中に苦しがつて氣絶してしまつたのを、若い女房は、その夜中であることも、この頃辻斬が流石るといふやうなことも知つて居りながら考へ直す餘裕がなく、良圓寺の内に住んでゐるお醫者を迎へに行きました。

夫なる人も亦、自分が女房に代つて醫者を迎へに行くことさへ氣がつかなくなつた位でしたから、氣絶した子供を抱えて、前後を顛倒して爲すべき業を知らなかつたものであります。

そのうち隣家の人も來て呉れましたけれど、女房は歸らないし、醫者も駈つけて呉れません。

隣家の人達が提灯をつけて、良圓寺まで、迎へに行つた時から、この騒ぎが始まつたものであります。

女房は歸らない筈、醫者も來ては呉れない筈——その若い女房は良圓寺の門前に斬られて居りました。

思慮のない人々は、その驚愕と戦慄と恐怖とを其のまゝ生で持つて來て、若い亭主の前へブチまけたから堪りません。

若い亭主は其の場で即座に發狂してしまひました。

抱いてゐた子を投げ出してグラム／＼と笑ひ出しました。

來て呉れた人々を見てもグラム／＼と笑ひました。釣臺で運んで來た其の女房の無惨な亡骸を見た時もグラム／＼と笑ひました。

幸にして一旦氣絶した子供は、醫者の來て呉れた事によつて蘇生して、無邪氣な笑ひ面を見せるやうになりましたけれど、親なる人のゲラ／＼笑ひは無制限に放縱なものになつてしまひました。

人が騒いでゐる間に、若い亭主はグラム／＼笑ひながら、フイと何處へか姿を見せなくしてしまひました。

これで小さな八日市の呉服店はつぶれてしまひました。地廻りの若い者達に岡焼をさせた愛嬌のあるおかみさんとお世辭のよい御亭主と、その間の可愛らしい子供から成り立つた平和な家庭が、根柢から摧けてしまひました。

市中の上下は其の慘虐なる殺人者の何者であるかを揣摩して、盛んに役向を罵りました。役向を罵るばかりでなく、各々進んで辻斬退治の爲に私設の警察を作らうとしました。

其の晩は幸に何事もありませんでしたけれど、其の翌日になるど、町の人々は氣の毒とも悲惨とも云ひやうのない一つの光景を見せられる事になりました。

發狂して親戚に預けられた呉服屋の若い亭主が、その子供を脊に負

うて何か言ひながら當途もなく町を歩いてゐる事でありませう。
 その若い亭主は何處を目當ともなく歩いてゐましたけれど、時々休
 んではグラ／＼と笑ひます。さうすると脊中にある子供は、それを
 喜んで、またキャツ／＼と笑ひ興じてゐるのであります。
 それ等の事を知るや知らずや机龍之助は、丁度それから三晩目の夜
 中に、そつと躑躅ヶ崎の古屋敷を抜け出しました。
 頭巾を被り、羽織を着、刀を差して、竹の杖をつくこと例の通りに
 して、いつの間にか愛宕町の東裏へ其の姿を見せましたが、そこへ
 来ると境町の方からズシ／＼と數多の人の足音が聞えました時に、
 龍之助は、時の鐘の櫓の下へ蜘蛛のやうに身を張りつけて、その足
 音をやり過ごしました。

「こんな處が險呑じや」

と云つて過ぎ行く一隊の中で六尺棒を突き立て、暫らく時の鐘の櫓
 の下に立つてゐる者もありました。

「斬る方では、こんな處が風見だけれど、わざ／＼此んな處へ斬ら
 れに来る奴はあるまい」

そんな事を云つて行き過ぎてしまひました。これは辻斬を警戒する
 爲に組織された一隊の足輕達と見えます。これを遣り過すと龍之
 助は、また静かに櫓の下から出て來ました。

濠を渡ると境町の通りであります。甲府の城を右に、例の牢屋を
 左に、その中の淋しい通りです。

そこをズツと市中の繁華な方へ歩いて來るうちにも、龍之助の勘が
 驚くべき程に發達してゐる事がわかります。一町二町先から人の足
 音を聞き取つて、高塚や木蔭に身を忍ばすことの巧妙なのは、さな

がら忍びの術の精妙から出でたものかとも思はれます。通り過ぐる人を物蔭から測量して、斬つて捨つべきか否かを吟味した後、行き過ごして物蔭から身を現はす時は、幽霊が出て来るやうであります。

三の廓まで出たけれども龍之助はまだ然るべき相手を見出さないやうであります。三の廓の留まりを直角に廻つて、龍之助は東に向を變えて歩みました。東に向きを變へるとお城が脊になつて、牢屋が左になつて、行手には長禪寺山が聳えてゐるのであります。

「ゲーブ、寒いナア」

「滅法界寒い」

折助が五人ばかり固まつて來ました。

「芋で一杯飲んで來たが此處へ來ると忌に寒くなりやがつた」

「それ、辻斬！」

「やい、嚇かすない」

こゝで黙つてしまひました。言ひ合せたやうに身ふるひをして、

「はゝゝゝ」

附元氣らしく高聲ひをして牢屋の方へ曲つて行きました。

それをも行き過ごして尙ほ廓の椽を歩んで行つた龍之助が、いつしか足を留めた處は、とあるお寺の門の前でありました。

龍之助は小首を傾げて杖で大地を突いて見ました。大地は別に異様な音を立てるではありませんでした。たゞ此の時分になつて、町も廓も一面に霧のやうなもので包まれてしまつた事でありました。さきには聳えて影を見せた日本丸の櫓も、それが爲めに見えなくなつてしまひました。今立つてゐるお寺の門も其の前の龍之助も同じく其

の霧のやうな霧で包まれてしまひました。

其の霧のやうな霧に包まれた甲府の町の夜は此の時静かなものでありました。その静かなうちに、町の辻々は例によつて辻斬警戒の組の者が六尺棒を提てのつし／＼と過ぎて行くのであります。

たゞ一つ不思議でならない事は、その静肅にして然も物騒なる甲府の町の夜の道筋の何れかを子供が泣いて歩いてゐるらしい事でありませぬ。

机龍之助が如法闇夜の中に一人で立ち盡してゐたのは、その子供の泣く聲を聞いたからであります。子供の泣く聲が、だん／＼自分に近く聞こえて来たからであります。

「モシ／＼」

と云つて、霧のやうな霧の中から、不意に言葉をかけたものがありました。

それは龍之助を見かけて、呼んだものとしか思はれないのであります。なぜならば龍之助の外に此の夜中に、こゝらあたりを歩いてゐる人があらうとは龍之助自身も思ひ設けぬ事でありました。

「モシ／＼、少々お伺ひ致したいものでございますがねへ」

斯う云ひながら近寄つて来るのであります。

近寄つて来る處によつて見れば、その脊中で子供が泣きじやくつてゐるらしい事でありませぬ。

龍之助は、たゞ黙つて立つてゐました。

こゝに於ても龍之助は、その自身すら、自分に近寄つて来る者の心のうちを推するに苦しみました。

殊にまだ乳呑兒らしいのを脊にして、この夜中に、人もあらうに、

自分を呼びかける人の心は計られぬのです。

「モシ、少々お伺ひ致したいのですがねへ」

龍之助は刀の柄へ手をかけました。さうして近寄つて来る者の足音に耳を傾けましたけれども、その足音は一人の足音です。その脊に負うた子供の外には、何者をも引きつれて来たとは思はれません。況んや此の男をオトリにして、あとから奥力同心だの、足輕小者だのいふ者が覗ひ寄るといふやうな形勢は更にありませんでした。

「モシ、少々お伺ひ致したいのですがねへ」

何等の怖れることゝ、憚る事が無しに龍之助の刀の下へ身を露出に持つて来る者があります。

「何を聞きたいのだ」

龍之助は撫然として返事をしてしまひました。

「あの、外ではございませぬがね、少々お尋ね申したいと云ひますのはね、それは私の女房の事なんでございませぬよ、私の女房はまだ若くつて中々愛嬌があるお神さんなのでございませぬよ」

撫然とした龍之助は此處に至つて啞然としました。あ、氣狂ひだ！
道理で……。

「その私の女房でございませぬがね、それは何處へ行つたんでございませぬ、どうも彼の女房に出られては、私も困るんでございませぬがね、中々愛嬌があつて人好きのする女でございませぬのですからね、近所の人も皆んな賞めて呉れましたんでございませぬよ、それで私との仲も好かつたんでございませぬよ、それが急に見えなくなつてしまつたものでございませぬから、私も心配なのでございませぬよ、それに坊やが斯うやつて泣くものでございませぬからね、どうかしてモ

ウーベン歸つて貰ひたいと思つてございませよ」
 遂に龍之助の傍まで来て其の袂を持つてグイ〜と引きました。
 「わしは知らない」

「左様でございますか、何でも人の話では良圓寺前で斬られたといふ事でございますが、そんな事があるものでございませか、ねえ、旦那、そりや嘘でございますねえ」
 續けざまに袂をグイ〜と引いて斯う云ひかけられた時に、龍之助は身ぶるひして見えない眼で其の男の面を見下しました。

甲府に徴典館といふものがありました。これは士分以上の者、又は農商のうちでも相當の身分の者の子弟が學問をする處であります。その晩の事、この徴典館へ多くの子弟が集まりました。多くは前髪

立のものばかりであります。

この集まりは別段、今ごろ騒がしい辻斬問題と交渉がある譯ではありません。只時々斯うして集まつて少青年の氣焰と談話とが賑はしく、また勇ましく語り合はれるものであります。

今、こゝで話題になつてゐる事を聞いても、それが此の頃の天下の形勢や、市井の辻斬の問題とは觸れて居りません。

彼等の間の話題は、近いうちお互に結束して山登りをしやうといふ事の相談でありました。その山登りをすべき山は何處に定めたら宜からうかといふ事にまで相談が進んでゐたのであります。甲斐の國の事ですから山に不足はありません。多過ぎる山のうちの其の何れを擇んでよいかといふ評議であります。

「富士山に限る」

と云つて大手を擴げたのがありました。それと同時に、富士山は甲斐のものである。それは古の記録を見てもよくわかる事である。然るに中世以來、駿河の富士、駿河の富士と云つて富士を駿河に取られてしまつた事は心外千萬である。甲斐の者は奮つて其の名前を取戻さねばならぬなんぞと主張してゐるものもありました。○
けれども此の説は事柄が壯快であるに拘らず、事實に於て問題が残つてありました。○

『然らば天子ヶ嶽へ登らう』

と主張する者もありました。名前が貴いから其れで若い人は其んな事を言ひ出したものと見えます。

それ等を最初にして、種々の説が出ました。御嶽の奥、金峰山が宜からうといふものもありました。或は天目山を推薦するものもあり

ました。少し飛び離れて駒ヶ嶽を指定するものもありました。

その山々の名が呼ばれるに従つて一々その山の地勢だの、その山から起つた傳説だの、そんな事が青少年の口から口へ泡を飛ばして語り合はれるから、中々山の相場が定まりません。

その中に、流鏑馬をやらうじやないかといふ説も出ました。この説が可なり有力な説になつて行きさうでありました。八幡宮で行はれる流鏑馬が久しく廢れてゐるからそれを起さうじやないかといふ説は、これ等の子弟の説としては根據もあり理由もある説なのでありました。

また一方に於ては我々でお能の催しでもしやうではないかといふ温雅な説も出て來ました。それは大した勢力は無かつたけれども一部のうちには中々熱心な面付をしてゐる者が無いではありません。

議論百出で、容易に何等の決定を見ませんでしたけれども大體に於て、近いうち徴典館の青少年は徴典館の青少年らしい催しをして、大いに元氣を揚げやうじやないかといふことに一致したのであります。それで今宵出て来た色々の議論を参考として、次回の集まりまでに成案を立てるといふことだけは此處で定まりました。それから各自に成るべく其の主張する處に多くの賛成者を求めやうとして、雑談の間に遊説を試みてゐるのもありました。それで夜の更けると共に席はいよ／＼興が乗つて行くばかりです。この連中が解散を告げて徴典館の門を出た時分に、黒闇の夜に例の霧のやうな靄が一ぱいに擴がつてゐました。後なる人は前の人の影をさへ見ることが出来ません。前の人はまた後の人の名を呼んで門の前から三々五々、その志ざす家路に歸らうとする時に、はじめて

此の青少年達に警戒の心が起りました。

もう夜が更けてゐる。暗い上に靄がかゝつてゐる、といふ晩に門外へ出ると、そゞろに此の頃の世間の噂の中の人とならない譯には行きません。

彼等は云ひ合はせたやうに三人五人固まつて行きました。空身であるのもあつたけれども、竹刀と道具などを荷つてゐるのもありました。お能をやりたいと云つた少年達のうちには特に得意の美音で、謠をうたひ出したのもありました。ましてや間近き鈴鹿山、ふりさけ見れば伊勢海……なんぞと口吟んだ時は如何にも好い氣持のやうでありました。

何處かで太鼓の音がしてゐます。それは近在の若い者達が囃の稽古をしてゐるものらしい。大胴を入れる音と、笛を合せるのとシヤギ

リの音までも手に取るやうに響いて来たものであります。

「あの連中は根氣は宜いな、寒稽古と云つて夜徹しやつてゐる事がある、太鼓を叩いて笛を吹いて馬鹿面を被つて踊る事さへも、あの通りの根氣がいる、それで、十年二十年と苦しんでも中々上手にはなれぬさうじや、況んや我々の武藝學問に於てをや」
 囃の稽古を聞いても此んな事を云ひ出すものがありました。

「一生苦しんでも出来ぬ奴は出来ん……と云つて一心を籠めて精を出せば僅の間にも上達する、拙者は此の頃、ふと或人の話を聞いた、歳は僅に十七、我々とさう違はぬけれど、この甲府城の内外には及ぶものは無からうとの劍術の達者があるといふ話を聞いた」
 彼等少年軍の多くは足駄を穿いて居りました。凍てついた大地を其の足駄穿きで、カランコロンと蹴ながら歩いてゐました。

「其んな人が何處に居る」

前へ進んだのが後を振り返りました。振り返つたけれど、やはりお互の姿は見えないのです。

「此の甲府に居るにはゐる」

「ナニ、左様な人が甲府にゐると、それならば教へを受けたいものだ、是非」

やはり前へ進んでゐた劍術の道具を荷つたのが踏み止まりました。

「甲府にゐるにはゐるけれど、居處が變つてゐるから、お紹介をするわけには行かんのじや」

「居處が變つてゐると、凡そ此の甲府の附近であつたなら、何處でも苦しくない、行つて教へを受けやうじやないか」

「それは我々には行けない處、先方も亦我々に來られない處だから

仕方が無い」

「其の様な處があらう筈がない」

「畢竟、この甲府の牢屋の中にあるのだから我々には會へん、また先方も出て來られんのだ」

「甲府の牢屋の中に、まだ少年でそして其れほどの劍道の達者がゐると、一體それは何といふ者で、何の罪で牢獄に繋がれたのじや」

「それは宇津木兵馬といつて、御金藏破りの嫌疑があつて、牢から出られない、聞く處によれば江戸で島田虎之助といふ先生の門人で直心蔭を學び、それから寶藏院の槍の極意に達し、突にかけては甲府城の内外は愚か、お膝元へ出て前にも前に立つ者は少からうとの事」

「それほどの人が、御金藏破り、そりや冤罪であらう、我々の力で如何かして其の冤罪を晴らしてやる工夫は無いものかな」

彼等は霧の中を歩いてゐるのだから、立ち止まつてゐるのだからわからない程であります。

徴典館の少年達の一組は斯んなことを話し合ひながら霧の中を歩いて行きました。

闇がいよ／＼黒くなる處へ霧がいよ／＼濃くなつて行くのでありました。霧といふけれども、やはり霧と云つた方がよいかも知れません。或は雲と云ふ方が當つてゐるかも知れません。天地が墨の中へ胡粉を交せて塗りつぶして行かれるやうです。

彼等の一組が御代官陣屋の方を指して行くと、

「あ、赤兒の泣く聲が聞えるではないか、諸君」

と云ふものがありました。

「成程」

と云つて耳を傾けました。成程、赤兒の泣く聲がするのであります。それも家のうちで泣いてゐるなら何の事は無いけれど、家の外、町から町を泣き歩いてゐるものゝやうであります。

だから少年達はまた一團まりになつて、

「ハテ、この夜中に子供が泣きながら道を歩いてゐやうとは」

「モシ〜」

その厚くて濃い闇と霧の中から不意に言葉がかゝりました。それは子供の言葉ではなく、

「少々承はりたうございますがね、わたしの女房は何處へ行つたんでございませう、わたくしのお神さんは何處へ参りましたらう、

まだ歸つて参りませんよ」

少年達は其の餘りに不意の言葉に驚かされてしまひました。それは

寧ろ怖ろしい位で、

「誰じや、誰方でござるな」

と誰何しましたけれども、それを耳に入れる容子はなく、それとは相反れた方へ行つてしまひながら、

「もし〜、少々物を承はりたうございますがね、わたしのお神

さんがまだ歸つて参りません、女房は何處へ参りましたらう」

そこで少年達は、

「狂人だらう」

「狂人じや」

と云つて氣の毒がりました。

その狂人と覺しい男は暫らくして足音も聞えなくなりましたが、やがて前の子供の泣く聲が異なつた方向で、町から町を筋を引いて歩

くやうに聞え出します。」

「危ないものだ、子供を脊負うて夜中にあゝして歩いてゐる、定めて女房に死なれて、氣が狂うたものと見ゆる」

「それに違ひない、併し、この頃のやうに物騒な時に、あゝして此の夜中を歩くのは薪を脊負て火の中へ駆け込むのと同じことじや、怪我が無ければよい」

「此處へ來れば取押へて家まで連れ戻してやらうものを、向うへ行つてしまつたから仕方が無い」

「あの男の事ばかりではない、我々も亦用心せんと……」

彼等は斯う云つて、また歩き出しました。元より此の一組の少年達のうちにも勇なるものと怯なるものがあります。けれども斯う固まつて見れば、勇なる者にも守る心が出来、怯なるものは勇なる者に

同化され、勇怯合せて一丸となつた別の心持に支配されるのであります。

例の子供の泣く聲が絲を引いたやうにして絶えることしばし。その時忽然として耳を貫く物の響が起りました。物の響といふうちに、やつぱり其れは活る物の爲せる聲でありましたけれど、前のは違つて人の腸にピリ／＼と徹えるやうな勇敢にして凄烈なる叫びでありました。

「や、あの聲は」

「狼ではないか」

「熊ではあるまいか」

少年達は又も足をどどめたが、その吠え落す聲を凝と聞き止めて、

「やつぱり、犬のやうじや」

今吠え出したそれは正に犬の聲であります。犬の聲ではありません。犬の聲ではありましたが、尋常の犬の聲とは思はれません。

それは扱置いて、このおつろらしい闇と霧の晩にも泰平無事なのは甲府のお牢屋の番人の小使の老爺であります。

小使の老爺は貰ひが澤山あります。牢の中にも金を持つてゐる奴は、小使に頼んで色々の物を買つてもらふ事が出来る。最初に持つてゐた金は役人の處へ取り上げられて必要に應じて少しづつ下げ渡される制度であつたが、その少しづつ下げ渡された金で、小使の老爺に頼んで、内々で色々の物を買ひ調へるのであります。

生姜や日光蕃椒を買つてもらふものもあります。紙の將棋盤と駒を買つてもらつて勝負を樂しむものもあります。武鑑を買つて貰つて讀むものもありました。お茶が無いので困る時には生姜や日光蕃

椒の外にヤタラ味噌や煮染などを買つて仲間へ大番振舞をへりるものもありました。また大奮發で二兩三兩と出して毛布の類を買ひ込んで寒さを凌ぐやうな贅澤なものもありました。裕を一枚買ひ足して重ね着をする者もありました。

酒は固く禁じてありましたが、それとても小使に頼めば薬を買ふといふ名臺で焼酎や直しを買つて來て呉れます。

その度毎に小使はコンミツシヨンが貰へます。コンミツシヨンが貰へる上に更に其の代金の頭を刳る事も出來ます。この頃贖金使ひといふのが此の牢へ入つてから、この小使の濕ほひがまた大きくなりました。それですからこの頃の小使は成金で、天下はいよく泰平です。

午後の四時から九時までの間にお役目だけの役人の見廻りがありま

す。その時は小使と番人どが、

「御見廻りでござりまするぞ」

と先觸をして各牢を廻つて歩くと牢内の一同が、

「御苦勞様でござりまする」

と云つてお禮を申上げるのが定まりになつて居りました。

此の成金で、さうして天下泰平であつた甲府の牢屋の牢番も、勤めに在る以上、やはり相當の責を盡さねばなりません。

「は、は、は、二番の贖金使ひの彌兵衛たらいふ奴は、さすがに贖金でも使つて見やうといふだけあつて話せる奴だわい、お寒いに御苦勞様でござりまするナカと云つて、袂の裾をふんわりと重くする奴さ、それに比べると武士上りは、忌に權式が高くつて藥の利き目が薄いのは癩だが、それにしても御方便におれの持場は皆んな客種が上等

で仕合せだ」

提灯を持つて、眠い眼をこすりながら立ち上がり、

「居るかな」

御定例に提灯をかざして一番の牢の内を覗いて見ました。

返事がしないのは、よく寝てゐる證據でありませう。牢番は領いて

第二番室の前、

「居るかな」

また御定例に提灯をかざし格子の中を覗いて見ましたが、此處でもやつぱり返事がありません。

天下も餘り泰平過ぎると氣味が悪くなるものです。いつも一人や二人返事をする筈のが一番二番を通して一人も返事をする者がありませんから、牢番も餘りの泰平に拍子抜けがして、なほよく格子の間

から覗いて見て、

「おや」

と云つて仰天しました。

この時分牢屋の外も、同じやうに墨と胡粉で塗りつぶした夜の色で包まれてゐました。

「破牢、破牢、牢破り」

この聲が牢屋の中の角から起ると共に牢の内外の泰平は一時に破れてしまひました。

「驚破！」

といふ騒ぎ、高張が附き提灯が付き、用意の物の具が、物ずさまじい音をして牢屋同心の人々の手から手に握られました。

けれども霧が深いから高張も提灯も其の光りが遠く及ばないのであります。人々の騒ぐのも、たゞ電燈の消えた湯屋の流し場の中で騒ぐのと同じことで、お互の姿を見て取ることが出来ません。況んや破牢の者共は、ドの道をドノ方向に逃げたのか、サツバリ其の見當もつきません。

「出合へ、出合へ」

といふ聲が北の方の外廻りの高塚の下で聞えましたから、同勢は其の聲をしるべに同じ方向へ駆て行きました。

「待て！」

と云ふ聲が聞えました。

「うーん」

と呻る聲と共に、ドサリと人の倒れる音がしました。

「何處だ、何方へ逃げた」